

修士論文

太宰治『人間失格』における「幸福」

教育学研究科

教科教育専攻

国語教育専修

国文学分野

13GP203 平井貴人

太宰治『人間失格』における「幸福」

目次

序章

第一節 初めに	3
---------	---

第二節 問題提起	4
----------	---

第一章 女達との関わりから『人間失格』を論じた先行研究	7
-----------------------------	---

第二章 葉蔵と女達①

第一節 葉蔵とツネ子	14
------------	----

第二節 葉蔵とシヅ子・シゲ子親子	25
------------------	----

第三章 葉蔵と女達②

第一節 葉蔵とヨシ子	37
------------	----

第二節 葉蔵と不幸	44
-----------	----

終章

終わりに	50
------	----

参考文献一覧	52
--------	----

序章

第一節 初めに

本論考では太宰治の『人間失格』を取り上げる。太宰治の晩年の作品であり、完結した長編としては太宰治最後の作品でもある。太宰治の作品群の中でも刊行直後から現代に至るまで絶える事無く読者を獲得してきた作品で、太宰治の代名詞とも言える作品の一つである。本論考は作品自体の成立や評価について深く検討してゆくものではないが、以下に簡潔に概要を記しておく。

『人間失格』の初出は昭和 23（1948）年に雑誌『展望』六月号に「はしがき」と「第一の手記」「第二の手記」が掲載され、続く七月号に「第三の手記」の「一」が、そして八月号に「第三の手記」の「二」と「あとがき」が掲載された。

「恥の多い生涯を送ってきました」という言葉から始まる「第一の手記」、続く「第二の手記」、「第三の手記」からなる三つの手記を、「はしがき」と「あとがき」の間で「私」が読み返すという構造の作品である。

「はしがき」では「私」がある男の三葉の写真を見ながら、それらの写真はそれぞれ男の幼年時代、学生時代、壮年時代の姿が写っており、「私」はその男の顔つきや表情について説明してゆく。「恥の多い生涯を送って来ました」という有名な一文から始まる「第一の手記」では、手記の書き手、語り手である「大庭葉蔵^{おおばようぞう}」の幼少からの苦悩が綴られる。「自分には、人間の営みというものが未だに何もわかっていない」と語る彼は、「自分の幸福の観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食いちがっているような不安」を覚え、「人間」に対する恐怖と不信の中、「道化」を用いる事によってかろうじて「世の中」での存在を得た。続く「第二の手記」では中学校への進学と葉蔵に二つの「予言」を残す「竹一」との交流が語られる。葉蔵は東京への進学により悪友「堀木正雄」と出会い、人間恐怖を紛らわす手段である酒や煙草や非合法運動、それからの人生で長い付き合いとなる女を知る。その女の一人であり、初恋の相手でもあるツネ子との心中までが語られる。「第三の手記」「一」では自殺幇助罪の起訴猶予となった葉蔵が雑誌社に勤めるシヅ子の世話になり、その娘のシゲ子と三人での同棲生活とその終わり、内縁の妻となるヨシ子との結婚を決意する直前までが語られる。「第三の手記」「二」ではヨシ子が商人に犯される事件を境に葉蔵の人生が破滅へと向かっていく経緯が語られ、モルヒネ中毒となり病院の精神病棟に隔離される「人間失格」の烙印を捺された葉蔵は「ただ、一さいは過ぎて行きます」と独白する。「あとがき」は手記を読み終えた「私」が、京橋のスタンド・バアのマダム（その時は喫茶店のマダムをしていた）と手記を書いた葉蔵について話す場面が描かれており、「私たちの知っている葉ちゃんは、とても素直で、よく気がきいて、あれでお酒さえ飲まなければ、いいえ、飲んでも、……神様みたいないい子でした」というマダムの発言で締めくくられている。

第二節 問題提起

まずは手記の書き手、語り手であり、本論考の主軸となる人物「大庭葉蔵」について語る事から始める。手記で語られるところによると、彼は子供の頃から人間の生活というものの自体に理解を示す事が出来ない人間であった。食事という人間にとって欠かす事の出来ない行為でさえ彼にとっては苦痛な時間でしかなく、彼はおよそ人間の営みの中からつまみだされた「異端者」であった。彼には人の幸福がわからず、それどころか自身の幸福というもののさえ分らない。そんな彼は自分を守るための道化を演じながらも、自分一人だけが異常な存在であるかも知れないという不安と恐怖に絶えず襲われていた。

彼は東京への進学と共に社会の様々な面に触れていく。その中で悪友の堀木と出会い、その後の人生で長い間付きまとう酒と女を知る。

ツネ子はその女の中でも葉蔵が初めて自分から好きになった女性であった。ツネ子と過す時間の中で、葉蔵はその後の人生では使う事は無いだろうという「幸福」という言葉を使う。ところが彼には幸福を恐れるという欠陥があった。

ツネ子とは情死事件を起こすが自分だけが助かり、その後世話になったシヅ子・シゲ子親子とは自分から身を引き、内縁の妻となる事が出来たヨシ子とは不幸な出来事から距離を置いてしまう。そのまま葉蔵は酒に溺れ薬に手を出し、最後には精神病棟に隔離される程の廃人となり自分自身に「人間失格」の烙印を捺した。彼は、「いまは自分には、幸福も不幸もありません」「ただ、一さいは過ぎて行きます」という言葉で手記の最後を締めくくっている。

この手記の最後の「幸福も不幸もありません」という言葉から、かつての彼には幸福も不幸もあり、それが時間の経過と共に消失したのではないかと考える事が出来る。何よりも「第一の手記」冒頭に、

自分の幸福の観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食いちがつているような不安、自分はその不安のために夜々、^{てんてん}転輾し、^{しんぎん}呻吟し、発狂しかけた事さえあります。自分は、いったい幸福なののでしょうか。(p383) ¹

とあるように、葉蔵はこの時自身の「幸福」というものに疑問を呈している。よって「世のすべての人たち」との認識の違いがあっても、葉蔵なりの「幸福の観念」というものと向き合っていたのではないかと、この文章から推察出来る。

そこで、本論考では上記の作中本文の言葉から端を発し、葉蔵にとっての「幸福」とはどのようなものであったかを問題提起とした上で、作品全体の描写、理屈について考察し

¹引用はちくま文庫版の『太宰治全集 9』（筑摩書房、1989年）による。また、注記が無い限り、頁数は『人間失格』（377～502頁）の範囲での数を記す。

ていく。これは「幸福」という視点からこの作品を読み進める事でより大きなものが見えてくるものがあると考えからであり、それは葉蔵の生き方にも関係している。

冒頭でも述べたが、語り手である大庭葉蔵は、幼い頃から人間の営み全般に対して常に懐疑的な目を向けている。食事という人間にとって欠かす事の出来ない行為でさえ彼の関心が向く事は無く、それは葉蔵にとってはただただ疑問なのであった。それらの価値観を表しているのが以下の記述である。(一部重複ではあるが、確認のため再び引用する。)

つまり自分には、人間の営みというものが未だに何もわかっていない、ということになりそうです。自分の幸福の観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食いちがっているような不安、自分はその不安のために夜夜、転転し、呻吟し、発狂しかけた事さえあります。(p383)

自分ひとり全く変わっているような、不安と恐怖に襲われるばかりなのです。自分は隣人と、ほとんど会話が出来ません。何を、どう言ったらいいのか、わからないのです。(p384~385)

これらの箇所において最初に注目しておきたいのは、「自分の幸福の観念」と「世のすべての人たちの幸福の観念」とを比べる事によって、自分とその他全ての人間を対立させている事である。これによって葉蔵は自分が世間の常識から隔絶された人間なのだと思ってしまう。つまり、自分ひとりに対してその他全ての人間が存在しているという圧倒的な孤独の中で、自分ひとりである事に恐怖を感じているのである。

自分は子供の頃から、自分の家族の者たちに対してさえ、彼等がどんなに苦しく、またどんな事を考えて生きているのか、まるでちっとも見当つかず、ただおそろしく、その気まずさに堪える事が出来ず、既に道化の上手になっていました。つまり、自分は、いつのまにやら、一言も本当の事を言わない子になっていたのです。(p385)

このように、一番身近な存在であった家族に対してさえも、葉蔵は本音を隠し「道化」で相手をするようになる。この部分は彼が自分を偽っている事の根拠であり、自分対人間一般という構図の強調という働きをしていると考えるのが妥当であろう。

これらの点を踏まえて考えるに、葉蔵は本当に隠したい、人間を理解出来ない自分を自己に内包し、道化を演じる事で人間達の中に存在する事を得たのである。葉蔵は自分と人間一般という絶対的な対立をしていたが、人々から笑われるという道化を演じる事で、擬似的ながらも人間でいる事が出来た。彼は人間を恐れながらも、その人間を思い切れずに「道化」を演じながら人間の世界で生きてきた。それを「求愛」という言葉で表現している。そこまでして彼が近づきたかった「人間」とは何なのか。『人間失格』における「人間」観を巡る

議論はこれまでの研究でもされてきた事だが、それを「幸福」という言葉の使われ方から見つめ直す事で、『人間失格』の新しい解釈を可能に出来るのではないかと考え、「幸福」というテーマを設定した。

また、「女に惚れられる」という竹一の予言の通り、三つの手記には先に述べた葉蔵と特に深い関わりを持った三人（ツネ子、シヅ子、ヨシ子）以外にも、実に数多くの女性が登場する。「はしがき」で「私」が見つめる幼年時代の葉蔵の写真が、「大勢の女のひとに取りかこまれ」た状態で写っている事からも、周囲に多くの女性がいる環境で葉蔵が育ってきた事は推し量れる。他にも海辺の中学校に入ってから世話になった親戚の家では「五十すぎの小母さん」とその娘の姉妹二人に「かまわれ」ていたし、東京に進学してからも下宿の娘や非合法運動の「同志」に惚れられ、ツネ子との心中事件の後に入院した病院では沢山の看護婦が葉蔵の病室に遊びに来た。さらに一時期泊まり込むようになった京橋のスタンド・バアのマダムや、ヨシ子の「決定的」な事件の後に薬のために「醜関係」を結ぶ事になる薬屋の未亡人、脳病院の精神病棟に入れられ完全な「廃人」になった後に田舎で世話をされる老女中の「テツ」である。葉蔵の「恥の多い生涯」はこれらの女達との関わりの中で語られる内容であり、先述したようにツネ子、シヅ子、ヨシ子との交わりは、葉蔵が特に手記の中でも多くの分量を費やしている部分である。加えてこれら三人の女性との関係の中で、葉蔵が「幸福」という言葉を用いる箇所が見られる点においても、その重要性は他の女達とは一線を画す。

以上の事から、本論考は『人間失格』における、ツネ子、シヅ子、ヨシ子を中心とした女達の関わりの中での葉蔵の在り方、及び彼が「幸福」という言葉をどう使い、それによって彼がどう変遷していったのかを考察して行く。

第一章ではこれまでの研究が女達との関係をどう述べているのか、代表的先行研究の概括と批判を行う。第二章からは本論考の主軸である女達との関わりから葉蔵にとって「幸福」がどのような位置付けであるのかを考察して行く。第三章では第二章での議論を踏まえながら、「幸福」と共に考えるべき「不幸」という視点からも検討を試みる。最後に終章で、『人間失格』における「幸福」という言葉の持つ意味をまとめ直して締めくくる。

第一章 女達との関わりから『人間失格』を論じた先行研究

この章では女達との関わりから論を述べた代表的研究者の論点を取り上げ、それを批判的に検証する事を通して、本論考の方向性を明らかにしてゆく。初めに『人間失格』の研究史をざっと概括しておく。

研究初期の『人間失格』の評価は、太宰治の実人生とその死から、作者と作品を同一視したものとして解釈されてきた。『人間失格』は太宰文学の「最高のかたち」での「遺書」であり「自画像」であるとされ、研究史はこの作家論に一度偏った。その代表とも言えるのが太宰研究初期の奥野健男氏²である。奥野の論は作者太宰治との関連の上で語られており、論拠もそちらに比重が置かれている。これ以後の研究はしばらく太宰治の作家論であるという読みから評伝とし長部日出雄氏らの研究が成果を挙げているものの、本格的な作品論の登場は研究初期には見られなかった。

このように、作品論として『人間失格』を作品単体として評価する傾向は 1960 年代までは下火であった。その理由の大半は『人間失格』という作品におけるリアリティの乏しさ、説明過多な点、そして作品としての完成度に帰結されるものであった。しかしながら、70 年代後半から東郷克美氏による「『人間失格』の渴仰」を始まりとし、女達との関わりは勿論、手記の語り手葉蔵の人間性、価値観を争点とした研究が見られるようになってくる。その後も 80 年代の作品論は饗庭孝男、鳥居邦朗氏らによって進められていった。90 年代に入ると、高田知波氏が『人間失格』の文章構成を題材とし、「語り」論的観点から葉蔵に関わった女達を位置付けた。³

これらを受けて近年は安藤宏氏の『太宰治 弱さを演じるということ』により、独自の他者論、コミュニケーション論が展開された。また、安藤は自身の論文において、『人間失格』における女性の描かれ方を述べてみせ、太宰文学の女性観というものを再検討した。

小林美恵子氏の考察は東郷の研究を出発点とし、『人間失格』の女達の中でもツネ子、シヅ子、ヨシ子の三人に絞った議論を展開している。これは序章で述べた本論考の主軸となる三人と同じであり、参考になる点が多い。

また、「幸福」という論点は先行研究の中には殆ど観られないが、最近の研究では綾目広治氏が「幸福」という問題を、語り手葉蔵の「幸福」としてではなく、関わった女達の幸不幸を考える事で逆方向から論じている。

これを元に、以下に代表的研究者の解釈をまとめる。

² 奥野健男『太宰治論』近代生活社、1956 年

³ 高田氏は「語り」という視点からの研究面において成果を挙げているが、本論考では女達との関わりという観点で参考にした。しかしながら、「語り」という議論は昨今の太宰研究で大きな争点となっているため、本論考においても深くは立ち入らないまでも、随時参考文献として触れて行きたい。

・東郷克美氏の解釈

作品論の始まりである東郷克美氏の「『人間失格』の渴仰」⁴から見てゆく。同論稿の中で東郷は『人間失格』を「さまざまの『女に惚れられ』て破滅して行く男の物語である」と意味付けており、葉蔵と女達の関わりについては「葉蔵の女性関係をたどってみると、それはそのままほとんど『人間失格』の梗概である」と述べているのは最初に注目しておいて良い点であろう。特に東郷が論の中で強調したのは、葉蔵が母親不在という境遇の中で育ってきたために、母体回帰の願望から女達との関係を築いて行ったという点である。

これは東郷の『人間失格』論の基盤となっている要素であり、東郷の論はこの母の欠落と母性への飢餓感を仮定して進めている。女達との関係と、女にとっての葉蔵の在り方を東郷は以下のようにまとめている。

「人間」が難解で恐ろしくてしかたがないはずの葉蔵がおびたしい女たちと交渉をもつのは、彼が単に「女達者」だからではなく、おそらく葉蔵のもつ母性的なもの（存在の連続性）への激しい渴きという治癒しがたい病のゆえである。葉蔵が女たちに求めているものが、単なる肉欲でないということは強調してもし過ぎることはない。一方、女たちにとっても葉蔵はその「孤独の匂ひが、何か女に夢みさせる雰囲気」をもっており、彼女たちはそれによって母性愛のようなものを刺激され、「本能に依つてそれを嗅ぎ当て寄り添つて来る」のだ。女たちが「年上」であり、「かまふ」あるいは「世話」をするというような仕方では彼に近づくのもそのことと関係がある。

この文章は葉蔵という語り手がどう存在してきたかを克明に表している。語り手葉蔵の母親に関する記述は手記には見られずに、逆に父親が人間恐怖の代表的な顔として規定されている事は東郷の述べる通りである。しかし、失われた母性を求めて女達と関わってきた葉蔵は決して母そのものには辿り着く事が出来ない。それでも女に母性を求める葉蔵の渴望は、いつも裏切られ、手痛い傷を負ってしまうのだ。東郷はこの事を「葉蔵の母性思慕とそれにもとづく女性聖化があまりに純粹かつ熾烈なものであるから、それが裏切られたときの絶望・憎悪も深い」と表している。

また、東郷は『人間失格』を「葉蔵における芸術への開眼と芸術家失格の物語でもある」と評している。これは葉蔵が竹一から送られた予言の一つ、「偉い絵画きになる」と関係しており、葉蔵がなりたいものであった「画家」という職業が実現されず、「無名の漫画家」になる事しか出来なかった事を示している。つまり葉蔵は脳病院への入院によって「廃人」となり「人間」に失格しただけでなく、芸術の道においても失格してしまったのである。

東郷の論は母性への渴望、芸術家失格の二点に集約されるだろう。これらを受けて後の研究者達はそれぞれの視点からの考察を開始する。

⁴東郷克美・渡部芳紀編『作品論 太宰治』（双文社出版、1976年）所収。

・高田知波氏の解釈

高田、安藤両氏は『人間失格』における文章上の虚構性、機能性という観点から独自の議論を打ち出しており、特に高田は自身の論稿『『人間失格』と〈葉蔵物語〉』⁵において三つの手記の語り手葉蔵の文章について以下のように述べた。

『人間失格』の大庭葉蔵は息絶え絶えの状態で三冊のノートに赤裸々な半生の告白を書き綴っていたわけではない。葉蔵は自身を素材にした〈物語〉を精力的に制作していた

これは葉蔵が手記を事後的に書き綴っている事に目を向けた指摘であり、この事を高田は同論稿の中で「小説『人間失格』は、そうした語り手の作為そのものを作品の構造の中に組み込んでいる」とまとめ直している。

この高田の論旨は観点こそ作品構造の「語り」においてあるものの、葉蔵と女達の関わりを考える上でも有力な意見を提示してくれた。特にツネ子とヨシ子を論じる際には高田の指摘は踏まえておきたい。高田はツネ子とヨシ子に対し、二人共に「リアリティ」が希薄であり、とりわけツネ子から葉蔵への「特別の愛情」は希薄であると述べる。また、関係の主導権があるのは葉蔵の側であり、ツネ子との関係の結末である情死に至る過程においても、情死直前の手記の文章を受けて以下のように批判している。

ここには、ツネ子が葉蔵に情死を「提案」した理由が何一つ語られていない。直接話法で再現された限りでのツネ子の言葉のベクトルはむしろ生の方角を示しているし、「人間としての営みに疲れ切つてゐるやうでしたし」という表現も、このときのツネ子の発言内容の要約ではなく葉蔵の推察であり、手記の読み手にも小説の読者にも、死を「提案」したとされる、そのツネ子の声を聞きとる事が不可能な叙述になっている。

ヨシ子についても同様に、ヨシ子が商人に犯された事件を題材に以下のように評した。

ヨシ子が“強姦”されたかどうかについての叙述の曖昧さはすでに指摘されているところであるが、それは〈葉蔵物語〉の関心が、事件そのものではなくもっぱらその意味付けに置かれているからだと思われる。語り手・葉蔵はこの事件がヨシ子の「無垢の信頼心」ゆえの悲劇である事を強調する。しかし新妻ヨシ子を徹底的な「無垢の信頼心の持ち主」、「信頼の天才」として規定する〈物語〉のプロットは、ヨシ子自身の声を排除することによって成立していると言っている。

⁵ (『駒沢国文』31 駒澤大学、1994年) 所収

ツネ子とヨシ子、この二人の女との関係において最も葉蔵が揺れ動く場面の解釈を、葉蔵が自身の中での一方的な意味付けによって女達を描き出しているとした。この高田の解釈は本論考の考察においても踏まえておくべき点であり、第二章以降でも必要に応じて参照してゆくとする。

・安藤宏氏の解釈

高田と同じく『人間失格』の構成と「語り」に着目した安藤は自身の著書『太宰治 弱さを演じるということ』⁶において、葉蔵の存在の仕方は他者との違いを意図的に語り出すレトリックの上に成り立っていると指摘した。本章冒頭の研究史でも述べたように、安藤はコミュニケーションという観点から他者と距離を置く上記の葉蔵の存在を説明している。殊に「人間」に対する「恐怖」と「不安」の問題と絡め、

＜人間＞それ自体よりもむしろ、人と人とのあいだ——関係——に極度に＜ナヴァスネス＞であらねばならぬという宿命。こうした主人公にとって望まれるのは、おそらく＜世の中＞から疎外された“被害者”という形で、マイナスのつながりを確認していく存在証明のしかたであったにちがいない。少なくとも“被害者”でいられるかぎり、加害者との関係（距離）を確定することができるのだから……。

おそらくここで必要なのは他者との直接のかかわりを避けつつ、なおかつ自他のちがいを浮き彫りにしていくしたたかな自意識なのだ。あるいはまた、あらかじめ自己と他者があって距離ができるのではなく、距離を斟酌してやまぬ「不安」こそが自己と他者との関係を創っていくのだ

という解釈を打ち出している。この被害者という存在であり続けたいという葉蔵の存在の仕方については、安藤の『人間失格』に対する評価の言葉として同著書に以下のように記されている。

おそらくこの小説の本質的な不気味さの一つは、葉蔵は自分を被害者として語りながら、真の意味での加害者が、ついに「手記」の最後まで現れることがないという事実であろう。いつか＜道化＞が見破られるのではないか、という恐怖は、逆に言えば、人間関係に＜恐怖＞している＜自分の正体＞を暴露してくれるものが、いつか現れるのではないかという、ひそかな期待を示すものであったにちがいない。葉蔵は実は被害者としての自己を正当化するために、心中密かに迫害者に出現を待ち望んでいる。作中に見え隠れする「父」の存在も、自分を真に律してくれる者への隠された渴望と、決して別のものではなかったはずなのである。

⁶筑摩書房、2002年

しかし、葉蔵を罰してくれる存在が現れないどころか、手記での葉蔵の半生は自分を受け入れてくれる大勢の女によって構築されていた。『人間失格』に登場する女達は決して自身からは葉蔵を非難しない。それどころか葉蔵の存在は許されてしまう。これまで確認してきた葉蔵の在り方と女達との関係を含め、安藤がかつて記した一つの論稿に安藤の『人間失格』解釈が克明に述べられている。

結局、＜シヅ子＞も＜ツネ子＞も＜マダム＞も、作中に登場する女性たちは無限に＜自分＞を受け入れ、＜ごまかし＞としての＜道化＞を許容してしまうのだ。作中のキーワードである＜恐怖＞は、その多くの用例が女たちから＜恩を受け＞＜尊敬され＞＜惚れられ＞＜かまはれる＞という受け身の形をとり、彼我の距離を侵食しようとする一方的な働きかけに対して用いられている点に注意したい。手記の書き手は終始一貫、自己を叱責してくれる“誰か”を待ち望み、それによって「他者」と自己との「へだたり」を言葉（手記）に実現しようとするのだが、結局出来ずに挫折してしまう。その意味では「人間失格」は、“人間失格者”になろうとして、ついになれずに終わってしまう「失格者」の物語であるともいえよう。⁷

葉蔵の在り方と手記に登場する女達の意味付け、それを他者との隔たりとコミュニケーションという観点から切り込んだ安藤の解釈はそれ以降の研究に一石を投じるものであった。

このような論の展開がなされた後、2000年に入ると共に更なる視点と意味付けを持ち出す研究者達が現れる。

・小林美恵子氏の解釈

小林の解釈は東郷が「『人間失格』の渴仰」の中で『人間失格』を「さまざまの「女に惚れられ」て破滅して行く男の物語」と位置付けた事を受け、その破滅の過程に関与した女三人に絞って取り上げた。すなわちツネ子、シヅ子、ヨシ子である。小林は自身の論稿『『人間失格』の女たち―「人間」葉蔵の語り部たち』⁸において、上記三人の女達は「葉蔵の語りによってしかその像を描く事は出来ないが、それだからこそ、彼女たち一人ひとりが葉蔵に残したものは鮮やかに浮かび上がる」と、高田の論を踏まえたと思われる記述をしている。小林はこの三人の女達について、一人ひとりに手記における位置付けと葉蔵へもたらした影響を理路整然と述べている。高田の「語り」への批判もあるのだろうか、小林の論稿は高田が触れなかったシヅ子の役割を論じた点に着目しておくべきであろう。よって本論考においては、第二章で葉蔵とシヅ子との関係を論じる節で改めて引き合いに出す事にしたい。

⁷安藤宏「太宰文学における＜女性＞」（『国文学：解釈と鑑賞』64（9）至文堂、1999年）

⁸『国文学：解釈と鑑賞』72（11）（至文堂、2007年）所収

ここでは小林が葉蔵の悪友である堀木をも女達との関わりから定義した事について触れておこう。

小林はヨシ子の事件に堀木が居合わせた事に着目し、「堀木と葉蔵のアント遊びとヨシ子の災難に因果関係はないものの、ヨシ子が男の手にかかるのは、この遊びが遊びを越え、二人が激しい対立をみせはじめたところに重なる」と指摘した。これを起点とし、小林は堀木が葉蔵と女達に対して持っていた役割を以下のように主張した。

堀木は、心中事件後シヅ子のもとに身を寄せた葉蔵に対し「しかし、お前の、女道楽もこのへんでよすんだね」と言い、ヨシ子が犯された当日も、ツネ子やシヅ子との関係を「女を死なせたり、女から金を巻き上げたり」したと表現する。挙句、「二匹の動物」を葉蔵にみせた後には、「お前もこれで、少しは思い知ったろう」と言い含める。「人間」堀木には、「法律」を犯しながら、女たちに守られるようにしてその罪から逃げ仰せるという「世渡りの才能」を発揮する葉蔵が許せない。堀木からみれば、ヨシ子の純粋は、「前科者」葉蔵に分不相応な宝であり、それがいつの日にか取り上げられるのは当然だという理屈になる。つまり、堀木とは、「人間」界の男のモラルを葉蔵に突きつける役どころを担った刺客ということができよう。舞台となっているのは「昭和五、六、七年」。「強い男の時代」にあって、葉蔵は「男性」失格、であったのだ。ヨシ子の受難が性的なものであったのも、そのためだろう。

堀木が「ヒラメ」⁹と同様に、葉蔵が恐怖を抱いていた「世間」の目に見える代表として語られている事については、さしあたり異論は無い。小林の解釈は別段目新しいものとは言えないものの、近年の研究において改めて堀木と女達、そして「世間」の関係をまとめ直したものとして踏まえておいて損は無いだろう。

こうして女達との関わりを論じた代表的研究者の解釈を見て来たが、具体的な作品論の始まりである東郷の研究の段階で、女達との関わりが葉蔵に何をもたらしたのかを検証する動向は既にあった。先行研究者達は如何な観点から『人間失格』を論じるかに腐心し、作者太宰治との実人生の上でそれを語ろうとしたのが研究初期の奥野であり、作品の「語り」という機構の側面から論を展開して見せたのが東郷の後の高田、安藤らであった。小林など近年の研究者達はそれら先人の研究を踏襲、或いは批判した上で独自の見解を打ち出していった。

本論考においては東郷が述べた「葉蔵の女性関係をたどってみると、それはそのままほと

⁹葉蔵の父親の東京にある別荘に出入りしていた書画骨董商。葉蔵と同郷の人物で葉蔵の「父のたいこ持ちみたいな役」と書かれている。本名は「渋谷」だが、顔や眼つきがヒラメに似ている事からそう呼ばれていた。

んど「人間失格」の梗概である」という言葉を踏まえて女達についての考察を主軸にした論を進めて行く。しかしながら高田、安藤らの「語り」という視点からの指摘は研究史として重要な観点であるために、手記における葉蔵の言葉の使い方、女達を描き出すために用いられた言葉には常に批判的態度で考察を試みる。その上で葉蔵に深く関わったツネ子、シヅ子、ヨシ子の三人の女に焦点を絞る小林の論稿とも向き合いながら、小林を始めとした近年の研究者が見落としてきた葉蔵における「幸福」という観点から、葉蔵と女達との関係を論じて行きたい。

次章からは具体的にツネ子、シヅ子、ヨシ子の三人にそれぞれ節を設けて、その時々による葉蔵の人生がどのように変遷し、その中で葉蔵が「幸福」という言葉とどう出会い、それによってどう破滅への道を歩んでゆくのかを述べる。

第二章 葉蔵と女達①

第一節 葉蔵とツネ子

物語の流れとして大きなものは、「第二の手記」でのカフェの女給のツネ子との心中事件である。ツネ子と出会った葉蔵が最後にした選択はツネ子と共に死ぬという道であった。

その頃葉蔵に「特別な好意を寄せて」いた三人¹⁰の女の中で最も葉蔵と深く関わりを持ち、また尚且つ彼の愛情の対象となったのはこのツネ子だけである。まずは手記におけるツネ子の登場について着目しておこう。手記で語られるところによると、先に登場した他の二人、下宿屋の娘、左翼思想の「同志」の女は一方的な好意を寄せてはいたものの、葉蔵本人はこの二人を以下に引用する通り煙たがっていた。

● 下宿屋の娘

自分もまた、知らん振りをして寝ておればいいのに、いかにもその娘が何か自分に言ってもらいたげの様子なので、れいの受け身の奉仕の精神を発揮して、実に一言も口をききたくない気持なのだけれども、くたくたに疲れ切っているからだに、ウムと気合をかけて腹這いになり、煙草を吸い、
「女から来たラヴ・レターで、風呂をわかしてはいった男があるそうですよ」
「あら、いやだ。あなたでしょう？」
「ミルクをわかして飲んだ事はあるんです」
「光荣だわ、飲んでよ」

早くこのひと、帰らねえかなあ、手紙だなんて、見えすいているのに。へへのもへじでも書いているのに違うんです。

「見せてよ」

と死んでも見たくない思いでそう言えば、あら、いやよ、あら、いやよ、と言って、そのうれしがる事、ひどくみっともなく、興が覚めるばかりなのです。

(p421)

● 「同志」の女

¹⁰ 混同を避けるために注記しておくが、ここで言う「三人」とはツネ子に加え、ツネ子と出会う前に葉蔵に好意を寄せていたと手記に書かれた下宿屋の娘と左翼思想の「同志」を含めた「三人」である。本論考の主軸であるツネ子、シヅ子、ヨシ子の「三人」とは別対象を指す。

「私を本当の姉だと思っていてくれていいわ」

そのキザに身震いしながら、自分は、

「そのつもりでいるんです」

と、愁えを含んだ微笑の表情を作って答えます。とにかく、怒らせては、こわい、何とかして、ごまかさなければならぬ、という思い一つのために、自分はいよいよその醜い、いやな女に奉仕をして、そうして、ものを買ってもらっては、（その買い物は、実に趣味の悪い品ばかりで、自分はたいてい、すぐにそれを、焼きとり屋の親爺などにやってしまいました）うれしそうな顔をして、冗談を言っただけは笑わせ〔後略〕（p422）

しかし、葉蔵からも好意を寄せられたのはツネ子だけであった。「第一の手記」において葉蔵がいかにか人間を恐れ、嫌い、理解を示せない自己を語っていたかという事を鑑みれば、葉蔵が他人である女と運命を共にしようとするのは一見不可解な事である。また、葉蔵が「幸福」について言及している箇所があるという意味でも、ツネ子との関係は葉蔵の「幸福」を考える上ではヨシ子と同等かそれ以上に重要である事は言うまでも無いだろう。

そこでこの節では、どうして葉蔵は死を選択し、しかもそれを他の人間と共にしようと考えたのか、その時の「幸福」に対する考え方はどうであったのかを、主に「第二の手記」における葉蔵の女に対する認識やツネ子との交流、そして「幸福」に関する記述を抜粋し、それを解釈しつつ考察していく。

ツネ子と出会う頃、葉蔵は父親によって下宿で一人暮らしとなっていたが、生活の変化から月々の送金は二、三日で消えてしまい、堀木に質屋通いを教えてもらっても尚金に不自由していた。そんな時期に十円だけ持って入ったカフェでツネ子との関係が始まる。

ツネ子についての描写は高田知波氏が述べるように¹¹、葉蔵に「特別の好意を寄せて」いた具体的イメージを有してはおらず、関係の主体性は葉蔵の側にある。確かに葉蔵が書き手である以上、その言葉の真偽について審議が必要になってくるのは今さら言うまでも無い事ではあるのだろうが、ツネ子の好意はどうであろうか。やはりこれも葉蔵の言葉を受け取っての推察から始めざるを得ない事ではあるが、手記の言葉を丹念に追っていくと、むしろ葉蔵がツネ子から受ける印象とツネ子の発する台詞から、葉蔵のツネ子に対する「特別の好意」を見出していくのが有効である事に気付く。

よってここで本論考における一つの読み方を提示しておく。すなわち、自分自身に主体性を置き、その上で相手の女性との共通項を見出して語る事によって初めて女性の実像が生み出されるのであり、それがこの手記を通した書き手の手法として一貫しているのではなかろうかという視点である。言い方を変えると、この手記においては、語り手の内面に引きつけて女性の描写をする事によってしか手記に登場する女性を描き出す事は出来ない

¹¹ 高田知波『『人間失格』と＜葉蔵物語＞』（『駒沢国文』31 駒沢大学、1994年）

仕組みが施されている。そして、この手法によって女達との関係を描いてゆく葉蔵であったからこそ、後述する以下の文脈に本来は無かったはずのリアリティが与えられ、読み手が多様な解釈をする事が可能となるのだ。¹²その根拠とも言えるのが以下の記述である。多少順番が前後するが大前提として確認しておきたい。ツネ子と出会った葉蔵が、ツネ子の借りている部屋へ行き、彼女の身の上話を聞かされる場面である。

一緒にやすみながらそのひとは、自分より二つ年上であること、故郷は広島、あたしには主人があるのよ、広島で床屋さんをしていたの、去年の春、一緒に東京へ家出して逃げて来たのだけれども、主人は、東京で、まともな仕事をせずそのうちに詐欺罪に問われ、刑務所にいるのよ、あたしは毎日、何やかやら差し入れしに、刑務所へかよっていたのだけれども、あすから、やめま
す、などと物語るのですが、自分は、どういうものか、女の身の上^{ばなし}というものには、少しも興味を持てないたちで、それは女の語り方の下手なせい
か、つまり、話の重点の置き方を間違っているせいなのか、とにかく、自分には、つねに、馬耳東風なのでありました。(p425~426)

この箇所の一何かが重要なのか。それは葉蔵がツネ子の自分語りを「自分には」「馬耳東風」であるとして興味を持てないものと切り捨てている点である。この記述は単に語り手葉蔵の女に対する一つの態度であると取るのではなく、敢えて語り手にとって興味の無い話であるにもかかわらず手記に載せている事によって、読者による女性像の構築を可能にする働きをしているのである。

さて、ここからは具体的にツネ子との交流を追っていき、本論考の主題である「幸福」の描かれ方について論じて行く事にしよう。初めに葉蔵が銀座の大カフェでツネ子と初めて出会った場面である。

「十円しか無いんだからね、そのつもりで」

と言いました。

「心配要りません」

どこかに関西の訛りがありました。そうして、その一言が、奇妙に自分の、震えおののいている心をしずめてくれました。いいえ、お金の心配が要らなくなったからではありません、そのひとの傍にいる事に心配が要らないような気がしたのです。

自分は、お酒を飲みました。そのひとに安心しているようで、かえってお道化など演じる気持ちも起らず、自分の地金の無口で陰惨なところを隠さず見せて、

¹² この事に関しては、第一章で取り上げた小林美恵子氏の解釈も論旨に組み込んでいる事を断わっておきたい。

黙ってお酒を飲みました。(p424)

これはツネ子との最初の会話だが、葉蔵はツネ子と出会った直後から、根拠となる記述は無いものの、感覚的、直感的に安堵し、ツネ子に対して心を許していると解釈出来る。

また、ここでツネ子の言葉遣いに関西の訛り¹³がある事にも着目しておきたい。葉蔵が女達に対して安心出来るのは自分との同類の親和感を持つためであるのだが、なぜここで言葉遣いについての記述があるかについて考えた時、この時葉蔵が住んでいた場所が東京であった事が理由として挙げられるだろう。葉蔵も出身は東北の田舎であり、東京に住む人々とは言葉に多少なりとも違いがあったとしても別段不思議な事ではない。ここでツネ子の言葉に関西の訛りがある事を気にかけてのは、東京以外の他郷出身であるという共通項で自分とツネ子を括る事によって「奇妙」とも言える安堵感を葉蔵にもたらしめているのである。それと同時に、この手記を読む受容者にとっても、小さなレベルからツネ子への共感を示唆する効果が期待出来るのである。

この箇所と合わせて、

本所の大工さんの二階を、そのひとが借りていました。自分は、その二階で、日頃の自分の陰鬱な心を少しもかくさず、ひどい歯痛に襲われてでもいるように、片手で頬をおさえながら、お茶を飲みました。(p425)

という場面でも見られるように、「陰惨なところを隠さず見せて」や「自分の陰鬱な心を少しもかくさず」といった記述がある事から、葉蔵はツネ子に対しては今まで人間に対して演じていた「道化」を一切する事なくツネ子と向かい合っている。これはその当時自分に特別な好意を持っていた下宿屋の娘や「同志」の女には見せなかった態度であり、この時点で既にツネ子が自分にとって特別な存在になっていくと予感する語りを生み出しているのである。

そのひとも、身の回りに冷たい木枯らしが吹いていて、落葉だけが舞い狂い、完全に孤立している感じの女でした。(p425)

ここで使われている何気ない言い回しにこそ注目したい。この箇所ではそのひと「も」という表現によって、ツネ子と葉蔵が互いに同類の存在である事を示しているのである。葉蔵の立場として考えるなら、ここでの「冷たい木枯らし」は理解出来ない世間一般の人間達を表

¹³ この前の引用と併せ、ツネ子のモデルであると言われている田部あつみが広島出身であり、銀座でカフェの女給をしていた事は往々にして論じられる事ではあるが、ここでは立ち入らない。むしろここでは、訛りについて態々手記に書かれてある事に目を向けたい。

しており、「第一の手記」において世間からずれている事に苦悩し、自分ひとりが世の中から外れた存在であった状態を、「完全に孤立している」という言葉を用いる事によって、自分とツネ子が共に世間とは隔絶している事を強調しているのである。

しかしながら、ここで一旦立ち止まって考えるべき問題がある。葉蔵は淫売婦達の所へ通っている時でも、それらが「白痴」か「狂人」のように思え、かえってそれらの方が同類の親和性を感じさせてくれるとして、その中での方が安心して眠る事が出来たと語っている。これだけでは自分と同じ側の存在であればツネ子でなくとも良いと考える事も出来るが、ツネ子がこれまでの女達とは違う事を確定的に意味付けるために、ツネ子にしか使わなかった表現が以下の言葉である。以下はツネ子の所で一夜明かした場面であるが、

あの白痴の淫売婦たちのふところの中で、安心してぐっすり眠る思いとは、また、全く異って、(だいいち、あのプロステチュウトたちは、陽気でした) その詐欺罪の犯人の妻と過した一夜は、自分にとって、幸福な(こんな大それた言葉を、なんの躊躇も無く、肯定して使用する事は、自分のこの全手記に於いて、再び無いつもりです) 解放せられた夜でした。(p426)

ここで使われた「幸福」という言葉は、「再び無い」と書かれてある通り、彼のその後の人生である「第三の手記」を読み進めても彼自身の気持ちとしては使用されておらず、後の人生で内縁の妻となるヨシ子にさえ直接は用いられる事の無かった表現である。ここで初めて語られる事になる「幸福」という視点であるが、そもそもこの時葉蔵が「幸福」という言葉を何の躊躇も無く使う事が出来ているのはなぜか。

その理由は主に二点挙げられるだろう。一つ目は、前述してきたように、葉蔵が「共感をそそられる」相手としてツネ子を捉えている点である。

侘びしい。

自分には、女の千万言の身の上嘸よりも、その一言の呟きのほうに、共感をそそられるに違いないと期待していても、この世の中の女から、ついにいちども自分は、その言葉を聞いた事がないのを、奇怪とも不思議とも感じております。けれども、そのひとは、言葉で「侘びしい」とは言いませんでしたが、無言のひどい侘びしさを、からだの外郭に、一寸くらいの幅の気流みたいに持っていて、そのひとに寄り添うと、こちらのからだもその気流に包まれ、自分の持っている多少トゲトゲした陰鬱の気流と程よく溶け合い、「水底の岩に落ち附く枯葉」のように、わが身は、恐怖からも不安からも、離れる事が出来るのでした。(p426)

この記述からも分かるように、葉蔵は女からの身の上嘸よりは「侘びしい」というたった

一言を求めている。それは正に自分自身が「トゲトゲした陰鬱の気流」の持ち主だからであり、その性質を受け止めてくれる自分と同質の「気流」を求めていたからだと言える。その共感を彼はこのツネ子という女性に見出した。それが「無言のひどい侘びしさ」である。ツネ子という同質の「気流」に寄り添う事によって、人間に対して抱いていた恐怖や不安から離れる事が出来る事に葉蔵は安堵していた。それがツネ子と初対面の時に感じた「そのひとの傍にいる事に心配が要らないような」気持ちの中身であろう。

二つ目は、これ以後から登場する金の話が全く介入していないからではないかという私論を試みてみたい。先の記述に戻ってみると、ツネ子と初めて会った時の会話においても、葉蔵は金の心配が無くなったからではなく、ツネ子の傍にいる事自体に安心していると語る。しかし、手記を読み進めて行けば明らかになってくる事ではあるのだが、葉蔵の語る「恥の多い生涯」において、金が無い事は単なる生活苦以上の精神面を含めた困窮を彼にもたらす。その事を考慮すれば、後々の人生で嫌という程自分を悩ませる事になる金の心配をせずに済むという事が、彼にとっては俗な苦悩から「解放」された特別な瞬間の一つの構成要素であった事は間違いないだろう。

以上二点より、この時の葉蔵はツネ子への共感と俗事からの「解放」によって「なんの躊躇も無く」受け入れる事が出来たのである。先に挙げた葉蔵の語りから推察するに、彼にとって「幸福」という言葉はとても「だいそれ」ているものであり、そこに葉蔵が「幸福」というものの外に自分という存在を置いている自己規定を見て取る事が出来る。ツネ子と過した一夜はそんな葉蔵がそれ以降の人生で「肯定して」使う事は「再び無い」だろうと語る程に、「幸福」というツネ子からもたらされた「気流」は喜ばしかったのだらう。

そんな葉蔵であったのに、彼はその直後、朝になって目を覚ました時にその「幸福」にさえ恐怖してしまう。

しかし、ただ一夜でした。朝、目が覚めて、はね起き、自分はもとの軽薄な、装えるお道化者になっていました。弱虫は、幸福をさえおそれるものです。綿で怪我をするんです。幸福に傷つけられる事もあるんです。傷つけられないうちに、早く、このまま、わかれたいとあせり、れいのお道化の煙幕を張りめぐらすのでありました。(p426～427)

「幸福」を受け入れる事の出来ない自分を「弱虫」と称する葉蔵はツネ子の元から逃げ出す。一夜明かした時点で葉蔵の「幸福」は最早彼を傷つけるものへと変貌していたと言うべきなのであろうが、それは「もとの軽薄な」「道化」に戻っていると語っている事から判断出来るであろう。思い出してみてもほしいのだが、ツネ子と出会った時の葉蔵は「道化」を使う事無く彼女と向き合っていたのに対して、ここでは「もとの」「装えるお道化」を演じる自分に立ち返っているのだ。つまり手記の記述の上ではツネ子と過した一夜

を指して「幸福」という言葉を使っているのにも関わらず、「早く、このまま、わかれたいとあせ」る葉蔵はそこから自分を切り離したいかのような心情を語っている。ここに、手記に「幸福」と書かれているにもかかわらず、その「幸福」から逃げ出してしまう葉蔵本人という語りのずれを読み取る事が出来るだろう。この「幸福」観に対する観念と行動のずれが後に「世話」にならざるを得ないシヅ子・シゲ子親子との生活で大きな意味を持つてくるのであるが、具体的な議論はその次節に譲るとして、ここではツネ子との「幸福」から逃げ出してゆく葉蔵の続きを論じよう。

それから、ひとつき、自分は、その夜の恩人とは逢いませんでした。別れて、日が経つにつれて、よろこびは薄れ、かりそめの恩を受けた事がかえってそろそろ、自分勝手にひどい束縛を感じて来て、あのカフェのお勘定を、あの時、全部ツネ子の負担にさせてしまったという俗事さえ、次第に気になりはじめて、ツネ子もやはり、下宿の娘や、あの女子高等師範と同じく、自分を脅迫するだけの女のように思われ、遠く離れていながらも、絶えずツネ子におびえていて、その上に自分は、一緒に休んだ事のある女に、また逢うと、その時にいきなり何か烈火の如く怒られそうな気がしてたまらず、逢うのに頗るおっくうがる性質でしたので、いよいよ、銀座は敬遠の形でしたが、しかし、そのおっくうがるという性質は、決して自分の狡猾さではなく、女性というものは、休んでからの事と、朝、起きてからの事との間に、一つの、塵ほどの、つながりをも持たせず、完全の忘却の如く、見事に二つの世界を切断させて生きているという不思議な現象を、まだよく呑みこんでいなかったからなのでした。(p427~428)

どれだけ「幸福」を喜びとして実感しようと、葉蔵の中でそれは一夜しか持続出来なかった。女性に対して「おびえて」しまう葉蔵は、根本にある人間への恐怖を払拭出来ていないのだ。この事に関しては小林美恵子氏の主張も一つ参考にしておきたい。小林は葉蔵が一度この「幸福」から逃げ出した事について以下のように述べている。

一夜明けたとたんに葉蔵がツネ子から逃げ出すのは、ツネ子が葉蔵との関係で満たされ、「佐びしさ」の気流を失い、普通の女になったからだろう。¹⁴

確かに葉蔵はこの夜を明かした後にツネ子も人間恐怖の対象となってしまう事に不安を抱いており、先に登場したツネ子以外の二人と同様に「自分を脅迫するだけの女」という疑惑をも抱いてしまっている。つまりこの一夜明けた場面において、葉蔵にとって

¹⁴小林美恵子『『人間失格』の女たち―「人間」葉蔵の語り部たち』（国文学：解釈と鑑賞 72（11）至文堂、2007年）

ツネ子は他と同じ普通の女に変換され、一度特別な存在ではなくなったのである。

しかし小林の主張は一理あるものの、葉蔵の手記に残された更なる要素を見落としている事を指摘せねばならない。ここで本論考では、葉蔵がツネ子の元から逃げ出す過程に、一つの要素を追加してみたい。確かにこの場面で葉蔵がツネ子に対して疑惑の念を持ってしまった事は踏まえておくべきだが、追い打ちをかけるかのように、葉蔵はこの時になってカフェの勘定をツネ子に負担させたという、「幸福」を感じた夜には考えてもいなかった「俗事」までも気になり始める点である。金と人の縁との関係について、葉蔵は以前ツネ子に以下のように語った事がある。

「金の切れめが縁の切れめ、つてのはね、あれはね、解釈が逆なんだ。金が無くなると女にふられるって意味、じゃあ無いんだ。男に金が無くなると、男は、ただおのずから意気銷沈^{しょうちん}して、ダメになり、笑う声にも力が無く、そうして、妙にひがんだりなんかしてね、ついには破れかぶれになり、男のほうから女を振る、半狂乱になって振って振って振り抜くという意味なんだね、金沢大辞林という本に依ればね、可哀そうに。僕にも、その気持わかるがね」

たしか、そんなふうの馬鹿げた事を言って、ツネ子を嘔き出させたような記憶があります。長居は無用、おそれありと、顔も洗わずに素早く引上げたのですが、その時の自分の、「金の切れめが縁の切れめ」という出鱈目の放言が、のちに到って、意外のひっかかりを生じたのです。(p427)

発言した時は「放言」と書かれる程度のものだったが、「意外のひっかかりを生じ」る事になるのが葉蔵のそれからなのである。この金の有無はツネ子との心中を葉蔵が決意する際に大きな一要素となってくる事を予め断わっておく。この金に対する葉蔵の発言にも留意しつつ、ツネ子と再び会ってから心中まで至る場面を追いながら解釈していく。

ツネ子と別れた後、一か月会う事の無かった葉蔵はある日堀木と飲んでいたが、その後お金が無くなっても尚飲もうとする堀木に対し、葉蔵はツネ子のいるカフェに行こうと提案する。

「よし、そんなら、夢の国に連れて行く。おどろくな、酒池肉林という、…
…」

「カフェか？」

「そう」

「行こう！」(p428)

ツネ子を頼みとした提案だったが、カフェで堀木の傍にツネ子が座った時、葉蔵は以下のように思った。

そうしてツネ子は、堀木の傍に、ドサンと腰かけたので、自分は、ハッとしました。ツネ子は、いまにキスされる。

惜しいという気持ではありませんでした。自分には、もともと所有慾というものは薄く、また、たまに幽かに惜しむ気持はあっても、その所有権を敢然と主張し、人と争うほどの気力が無いのでした。(p429)

自分はツネ子に所有欲など無く、あったとしても人と張り合うまではこだわる事が出来ないまで独白し、その上ですぐに諦めてしまった。以下は事の顛末である。

「やめた！」

と堀木は、口をゆがめて言い、

「さすがのおれも、こんな貧乏くさい女には、……」

閉口し切ったように、腕組みしてツネ子をじろじろ眺め、苦笑するのです。

「お酒を。お金は無い」

自分は、小聲でツネ子に言いました。それこそ、浴びるほど飲んでみたい気持でした。所謂俗物の眼から見ると、ツネ子は酔漢のキスにも価値しない、ただ、みすばらしい、貧乏くさい女だったのでした。案外とも、意外とも、自分には霹靂に撃ちくだかれた思いでした。自分は、これまで例の無かったほど、いくらでも、いくらでも、お酒を飲み、ぐらぐら酔って、ツネ子と顔を見合せ、哀しく微笑み合い、いかにもそう言われてみると、こいつはへんに疲れて貧乏くさいだけの女だな、と思うと同時に、金の無い者どうしの親和（貧富の不和は、陳腐のようでも、やはりドラマの永遠のテーマの一つだと自分は今は思っていますが）そいつが、その親和感が、胸に込み上げて来て、ツネ子がいとしく、生れてはじめて、われから積極的に、微弱ながら恋の心の動くのを自覚しました。(p430)

ここで、微弱ながらも自発的な恋心の芽生えという、葉蔵の人生にとって初めての出来事が起こる。一方では俗物（恐らく堀木やその他の人間達）のキスにも値しない貧乏くさいだけの女だと思ふものの、それと同時に親和感が葉蔵の心を満たしてくれている。ここにおいて葉蔵に再び心情の変化が現れる。先述した小林の論によれば、

生涯再びないほどの「幸福な」一夜をツネ子と過した葉蔵にとって、ツネ子に下された第三者からの判定は、自己に与えられるそれと同一の意味をもつと考えられたのであろう。そしてまたそのことは、葉蔵に、この世でたった一人の同志としてのツネ子を発見させる。これが葉蔵のツネ子に抱いた「微弱なが

ら」もの「恋の心」の本質と思われる。

との事であるが、ここでもう一点着目すべきは、その判定を下したのが堀木であるという点ではなかろうか。この時、ツネ子を一度普通の女と同様に恐怖の対象として疑問を抱いていた葉蔵はカフェの支払いをさせてしまった「俗事」ですら気にするようになっていた。そんな葉蔵は堀木のような「俗物」の目から判断された言葉を、ツネ子を通して自分にぶつけられたのである。

ここで、「俗事」と「俗物」という語の連関に着目しても良いだろう。葉蔵は堀木を「俗物」という言葉で表している。これまでの研究でも言われていた事だが、堀木は葉蔵が恐怖を感じる「世間」が肉化した存在としての側面を持っている。カフェの支払いという金に関する事を「俗事」として語る葉蔵にとっては、この時ツネ子に下された「貧乏くさい女」という金銭的な侮辱は単なる侮辱の言葉以上の意味を持つ。すなわち堀木という「俗物」から「俗事」を指摘される事は、それまでの人生で自分が感じていた「世間」の恐怖を改めて強調された事を意味するのである。そして皮肉な事に、その認識によって再び葉蔵はツネ子を「恋の心の動く」相手として捉え直し、「哀しく微笑み合う」「貧乏くさい女」と、金の無い者同士の親和によって、改めて「いとしく」感じたのであった。

この後で二人は心中に至るわけだが、カフェを二人で後にした時、葉蔵はツネ子から「死」という言葉が出てきた時でさえ、実感としての死の覚悟はできていなかった。

それから、女も休んで、夜明けがた、女の口から「死」という言葉がはじめて出て、女も人間としての営みに疲れ切っていたようでしたし、また、自分も、世の中への恐怖、わずらわしさ、金、れいの運動、女、学業、考えると、とてもこの上こらえて生きて行けそうもなく、そのひとの提案に気軽に同意しました。

けれども、その時にはまだ、実感としての「死のう」という覚悟は、出来ていなかったのです。どこかに「遊び」がひそんでいました。(p431)

ツネ子の「人間としての営みに疲れ切ってい」という、自身との共通点から死ぬ事には「気軽に」同意した葉蔵であったが、そんな彼が死を心に具体的なものとして思い描いたのは以下の箇所だろう。死ぬ事を決めた二人が喫茶店に入って牛乳を飲み、店を出る会計の時にツネ子が葉蔵の財布の中身（銅銭三枚）を見た場面である。

「あら、たったそれだけ？」

無心の声でしたが、これがまた、じんと骨身にこたえるほどに痛かったのです。はじめて自分が、恋したひとの声だけに、痛かったのです。それだけでも、これだけもない、銅銭三枚は、どだにお金ではありません。それは、自分が未だ

かつて味わった事の無い奇妙な屈辱でした。とても生きておられない屈辱でした。所詮その頃の自分は、まだ金持ちの坊ちゃんという種属から脱し切っていなかったのでしょう。その時、自分は、みずからすすんでも死のうと、実感として決意したのです。(p432)

本論考において金話を予め踏まえておいた事も、ここからの議論の前提にするためである。葉蔵は自分を「金持ちの坊ちゃんという種属から脱し切っていなかった」と自虐するが、それが「屈辱」であったのは金が無い事への深い失望からである。そもそも彼が「金持ちの坊ちゃん」だったのは誰によるものか。それは家の長である父親だった。裕福な家に生まれ、その中で生きてきた葉蔵が、金がある事が前提での生活をしてきた事は容易に想像出来る。この時の「とても生きておられない屈辱」の原因を作っていたのは家なのだ。ツネ子から「死」という言葉が出てくる前の葉蔵とツネ子との会話からそれが読み取れる。

「金の切れめが縁の切れめ、なんておっしゃって、冗談かと思うていたら、本気か。来てくれないのだから。ややこしい切れめやな。うちが、かせいであげても、だめか」

「だめ」(p431)

ツネ子が金を稼いで自分を養ってくれようと、それは自分の金であるとは思えない彼はその好意を享受できない。葉蔵は女に稼いでもらうのではなく、自分に金が無ければだめなのだ。かつて「金持ちの坊ちゃん」であった自分が、今はとても金とは言えない銅銭三枚しか持っていない。それは葉蔵にとっては「屈辱」以外の何物でもないのだ。その事を彼はツネ子から指摘された。初めて自分から愛した女の人というのは、葉蔵にとっては現代社会で言うところの単なる初恋の人とは違う。前述したように、生まれてからそれまでの人生で「世間」というものに興味を持たず敬遠し、人間の営みというものに一切の理解を示せず、道化となつてかろうじて「世の中」を生きてきた葉蔵には、ツネ子の直前の言葉はより強烈に突き刺さり、彼を失意の底に突き落とすのには充分過ぎた。その失意の先にあったのが死を「実感として決意」する事なのであった。孫才喜氏が述べるように¹⁵、ツネ子との関係は決して清純なものではなく、自分との共通項を見出して語る歪みを持ったものだった。この箇所において葉蔵が死を決意したのも、「坊ちゃん」意識の崩壊による「奇妙な屈辱」によるものであり、最終的なツネ子との関係は、葉蔵の独りよがりな語り口からも分かるように、悲劇的な最期を迎えたのである。

これらを総合すると、葉蔵は自分が「とても生きておられない屈辱」から死を選択したの

¹⁵孫才喜「太宰治『人間失格』論—葉蔵における「道化」・甘え・恥と罪—」（日本文藝研究 51（4）関西学院大学日本文学会、2000年）

だと言える。そして、その死をツネ子と共にしたのは、たとえツネ子の発した言葉で傷付こうとも、それまでの記述で何度も確認したように、それまで全く溶け込む事が出来なかった人間達の中で、唯一見つけたツネ子という自分と同類の存在への親和感が、その女を死の伴侶として選んだのである。

第二節 葉蔵とシヅ子・シゲ子親子

ツネ子との心中未遂の後、ヒラメの家に世話になる形で窮屈な生活を強いられていた葉蔵は、飛び出した先の堀木の家で、雑誌社で働くシヅ子という女性と出会う。ツネ子を初恋の相手、死の伴侶として語るならば、このシヅ子の役割は何か。小林美恵子氏によればシヅ子の位置付けは以下のように述べられている。

シヅ子を数々の女性たちの中で特徴づけると、葉蔵に生きる場を与え、漫画家にし、葉蔵と故郷との縁を完全に絶った人、ということになる。彼女は葉蔵が漫画家になれたことを喜び、満足しているに違いない。葉蔵が故郷と絶縁させられたのも、自分が葉蔵の面倒をみるという契約でシヅ子が葉蔵をツネ子の事件の社会的後遺症解放してやり、自由を与えたものと思われる。葉蔵の弱さをよく知るシヅ子は、彼女なりに葉蔵の幸せを考えてこれらを実行したのだが、葉蔵は少しも解放されない。¹⁶

シヅ子が満足を感じているというのは、恐らく後述する彼女が葉蔵に対して施した「世話」という事になるのであろうが、そこにシヅ子の「満足」があった事を肯定するのには疑問がある。ツネ子の節でも触れたが、葉蔵が自身と関わった女性を語る際の手法は、如何に自身の内面に引きつけて描き出すかという語り口である。しかし、シヅ子がこれ以前のツネ子やこの後に登場するヨシ子と決定的に異なっているのは、葉蔵が自身の内面からシヅ子に好意を見出す描写が希薄過ぎるという点である。

いずれにせよ、語りの主体は手記の語り手（書き手）である葉蔵であるため、葉蔵の内面の心理的推移にも着目しておいて損は無いだろう。そこで本論考においてはシヅ子（と娘のシゲ子）との生活について、もう一つの側面を見出しておきたい。それは葉蔵の人間不信、人間恐怖を一層描き出すための配役でもあったという点である。というのも、シヅ子との関係においてはシヅ子の好意があればある程、つまり葉蔵に対して物理的、精神的に近づけば近づく程、葉蔵はシヅ子から離れたいと思うようになっていく。ここにどんな理屈を読み取るかを考えるために、シヅ子が葉蔵に対して好意的に接している箇所を取り上げて解釈し

¹⁶小林美恵子『『人間失格』の女たち―「人間」葉蔵の語り部たち』（国文学：解釈と鑑賞 72（11）至文堂、2007年）

て行き、この時の葉蔵が「幸福」をどう捉えていたのかを考えてみる。

シヅ子との生活が始まってから、葉蔵はシヅ子とその娘のシゲ子と三人で高円寺のアパートで「男めかけみたいな生活」をしていた。初めの一週間程は働きに出たシヅ子の留守の間、シゲ子の相手をする役目といったところであったが、

「お金が、ほしいな」

「……いくら位？」

「たくさん。……金の切れ目が、縁の切れ目、って、本当の事だよ」

「ばからしい。そんな、古くさい、……」

「そう？ しかし、君には、わからないんだ。このままでは、僕は、逃げる事になるかもしれない」

「いったい、どっちが貧乏なのよ。そうして、どっちが逃げるのよ。へんねえ」

「自分でかせいで、そのお金で、お酒、いや、煙草を買いたい。絵だって僕は、堀木なんかより、ずっと上手なつもりなんだ」

このような時、自分の脳裡におのずから浮びあがって来るものは、あの中学時代に画いた竹一の所謂「お化け」の、数枚の自画像でした。失われた傑作。それは、たびたびの引越しの間に、失われてしまっていたのですが、あれだけは、たしかに優れている絵だったような気がするのです。その後、さまざま画いてみても、その思い出の中の逸品には、遠く遠く及ばず、自分はいつも、胸がからっぽになるような、だるい喪失感になやまされ続けて来たのでした。

飲み残した一杯のアブサン。

自分は、その永遠に償い難いような喪失感を、こっそりそう形容していました。絵の話が出ると、自分の眼前に、その飲み残した一杯のアブサンがちらついて来て、ああ、あの絵をこのひとに見せてやりたい、そうして、自分の画才を信じさせたい、という焦燥にもだえるのでした。

「ふふ、どうだか。あなたは、まじめな顔をして冗談を言うから可愛い」

冗談ではないのだ、本当なんだ、ああ、あの絵を見せてやりたい、と空転の煩悶をして、ふいと気をかえ、あきらめて、

「漫画さ。すくなくとも、漫画なら、堀木よりは、うまいつもりだ」

その、ごまかしの道化の言葉のほうが、かえってまじめに信ぜられました。

「そうね。私も、実は感心していたの。シゲ子にいつもかいてやっている漫画、つい私まで嘖き出してしまう。やってみたら、どう？ 私の社の編集長に、たのんでみてあげてもいいわ」

その社では、子供相手のあまり名前を知られていない月刊の雑誌を発行していたのでした。(p451~453)

といった流れでシヅ子の勤める雑誌社から漫画を出版してもらい、その金を収入にし、シヅ子との同棲生活を始める。この箇所において最初のシヅ子の好意を読み取る事は可能である。さらにシヅ子は葉蔵に対する懇意について以下のように語る。

……あなたを見ると、たいていの女のひとは、何かしてあげたくて、たまらなくなる。……いつも、おどおどしていて、それでいて、滑稽家なんだから。……時たま、ひとりで、ひどく沈んでいるけれども、そのさまが、いっそう女のひとの心を、かゆがらせる。(p453)

これら二か所の引用から読み取れる事として、ツネ子の時とは違い、葉蔵はシヅ子との関係に初期の段階から「道化」を持ち込んでいる。一方、シヅ子は「いつも、おどおどしていて」という葉蔵の人間恐怖の部分を理解はしているものの、葉蔵が望んでいる具体的な何かを察しているわけではない。この生活において、シヅ子は終始葉蔵の世話を焼く事に積極的であり、そういう意味では葉蔵が親しくなった女達の中では最も葉蔵に優しくかったと言っても良いのだろう。しかし、その行為が続けば続く程、葉蔵の心情は芳しくなくなってゆく。今確認した箇所においても、葉蔵はシヅ子との会話の中で、本当は中学時代に画いた「自画像」を見せてやりたいと思っていたのに、その思いを「あきらめて」しまう。結果として葉蔵からシヅ子に発せられたのは、「漫画」を描くという「ごまかしの道化の言葉」であった。この偽りの職業の成立に見られるように、シヅ子との生活で葉蔵の願望とシヅ子の「世話」は悉く噛み合わない。彼は上記のシヅ子の発言や「世話」に対して、

シヅ子に、そのほかさまざまの事を言われて、おだてられても、それが即ち男めかけのけがらわしい特質なのだ、と思えば、それこそいよいよ「沈む」ばかりで、一向に元気が出ず、女よりは金、とにかくシヅ子からのがれて自活したいとひそかに念じ、工夫しているものの、かえってだんだんシヅ子にたよらなければならぬ破目になって、家出の後仕末やら何やら、ほとんど全部、この男まさりの甲州女の世話を受け、いっそう自分は、シヅ子に対し、所謂「おどおど」しなければならぬ結果になったのでした。(p453)

このように独白する。女からの好意で生活が出来てもそれが「男めかけのけがらわしい特質」と思えば喜びを一切感じず、むしろそれが引け目となっていた。シヅ子が葉蔵の「世話」をする理由は小林によれば

葉蔵には「随分苦勞して育ってきたみたい」な気のきく一面があり、それが「可哀そう」に感ぜられ、またおどおどしていながら滑稽であり、かつ時たまひとりで沈んだりしているところが「心を、かゆがら」せ、「何かしてあげたくて、たまらな

くなる」のだという。これは、これまで葉蔵をかくまってきた女たちすべての思いを代弁するものだろう。シヅ子にとって葉蔵は、「何かしてあげる」ことで自分の心が満たされる愛玩物、つまりまぎれもなく「男めかけ」なのである。葉蔵に何も求めないのも、そのためであろう。おどおどしたり沈んだりしている姿の葉蔵をこそ愛する女たちにとって、彼がそのおびえた心ゆえに酒におぼれることは、「いいひとだから」という言葉と何ら矛盾しないのである。

とのことであるが、ここで葉蔵はシヅ子から離れて自活したいという淡い願望を抱く。シヅ子に頼らざるを得ない自己を嫌悪しながらも、今まで何事にも固執する事を知らなかった葉蔵から発せられた数少ない能動的思考である。この事をより深く考えるためにも、以下の記述を踏まえておきたい。

葉蔵は自分の描いた漫画で得られた金で酒も煙草も買う事が出来るようになったが、その結果に反して以下のように心情を洩らす。

シヅ子の奔走のおかげで自分の漫画も案外お金になって、自分はそのお金で、お酒も、煙草も買いましたが、自分の心細さ、うっとうしさは、いよいよつのるばかりなのでした。(p453)

このように、自分の描いたもので稼いだという実績に反して葉蔵の心は晴れず、嬉しいという感情は全く無かった。それどころか彼には「心細さ」が募るばかりである。第一、本当に金を稼ぐ事が自身の幸せにつながるのならば、シヅ子の心遣いに従って漫画を描き続ける生活を続けていけば気にせずとも実現出来る生活である。とすれば、葉蔵が最初に言っていた「お金がほしい」は、金銭としての金というよりは、自分が求めるものを総称しての代名詞的な言葉だったのだと考える事が出来よう。シヅ子に対して葉蔵は、金と縁の切れ目の話をする。「馬鹿らしい」と否定するシヅ子であったが、葉蔵にとって金が無いという事は世間一般とは違う。通常では金がある男に惹かれた女は、男に金が無くなると女の方から離れていく。しかし葉蔵の場合は金が無くとも女が自分に好意を示し寄って来るのだ。その証拠にツネ子からは「うちが、かせいであげても」という言葉が出てきたし、シヅ子との生活においても、葉蔵の「お金が、ほしいな」に対してシヅ子の「いくら位？」は葉蔵が望むなら自分が金を出しても良いという意志を読み取る事が出来る。

では、葉蔵にとっての金の有無はどういう意味を持っているのか。葉蔵と金の関係はツネ子との関係の中でも語られた事ではあるが、ここでは再び目を向ける必要があるだろう。ここではツネ子の時とは違った意味で金の問題が浮上してくる。一旦論旨からは逸れるが、念の為確認しておきたい。金がある事、女との関わり、そして縁の切れ目、これらを結ぶ葉蔵の考えは以下の箇所に端的に記されている。

酒、煙草、淫売婦、それは皆、人間恐怖を、たとい一時でも、まぎらす事の出来るずいぶんよい手段である事が、やがて自分にもわかって来ました。それらの手段を求めるためには、自分の持ち物全部を売却しても悔いない気持さえ、抱くようになりました。(p412)

金がある事は葉蔵にとっては人間恐怖を紛らわすための手段を得るために必要な条件だったのだ。金があれば酒も煙草も女も手に入る。「金が欲しい」とは、人間への不信と恐怖を拭い切れない彼にとって、逃避のための手段を求めた言葉としての表出である。そしてその金が無くなるとどうなるか。先に確認したように、普通であれば金が無い男の下には女は寄ってこないが、葉蔵にはそれが当て嵌まらない。金が無くても葉蔵には女が寄ってくるが、その人間恐怖を紛らわせる手段を持たない状態では彼はそれに耐えられないのである。シヅ子の「いくら位？」という問いに対して、具体的な金額を述べずに「たくさん」と返す理由は単なる生活苦を指さずに、自身の防壁が尽きる事を防ぐためなのである。この事を踏まえて話を元に戻そう。

「自活したい」という葉蔵の小さな願いはシヅ子の「世話」が無ければ始まらなかったし、維持も出来ない現実が葉蔵には突きつけられていた。葉蔵がシヅ子からの「世話」を受ければ受ける程「おどおど」しなければいけなかったのは、金が無ければ逃げ出したくなる程の恐怖を感じているのに、その緩和のためにも自分から「世話」になりに行かなければならないというジレンマのためである。小林がシヅ子について「葉蔵の弱さをよく知る」¹⁷と述べていた通り、シヅ子は葉蔵の弱さ“しか”気付いてやれなかった。シヅ子が葉蔵の内面の困窮に気付けずに、彼の職業が「漫画家」という「ごまかしの道化」として定まってしまった事は小林も指摘する所ではある。この職業の決定も含め、シヅ子に「世話」を焼かれ、「さまざまの事を言われて、おだてられ」る事を葉蔵が「男めかけのけがらわしい特質」と見做してしまうのは、この「自活」と「世話」の二律背反という理屈も根拠となり得るのではないか。

加えて、ここでの生活において、金を稼いでいる彼の心が満たされなかった原因が、別に恐怖すべき対象が傍にいた事にも理由があるという解釈を、本論考におけるもう一つの視点として論述しておきたい。それがシヅ子の娘であり、辛い時の幽かな救いだと葉蔵が思っていたシゲ子であった。この論点においてシゲ子は重要な意味を持つてくるのである。葉蔵は以下の会話によってシゲ子に恐怖する。神様に祈る事で欲しいものをもらえると話していた場面である。

「シゲちゃんは、いったい、神様に何をおねだりしたいの？」

自分は、何気無さそうに話頭を転じました。

「シゲ子はね、シゲ子の本当のお父ちゃんがほしいの」

¹⁷ 本節冒頭の引用から

ぎょっとして、くらくら目まいしました。敵。自分がシゲ子の敵なのか、シゲ子が自分の敵なのか、とにかく、ここにも自分をおびやかすおそろしい大人がいたのだ、他人、不可解な他人、秘密だらけの他人、シゲ子の顔が、にわかにそのように見えて来ました。

シゲ子だけは、と思っていたのに、やはり、この者も、あの「不意に蛇を叩き殺す牛のしっぽ」を持っていたのです。自分は、それ以来、シゲ子にさえおどおどしなければならなくなりました。(p455)

救いだと思っていたシゲ子でさえ自分の人間恐怖を刺激する存在であるのかもしれない。それは彼にとって人間不信による不安をより強くしてしまう事なのである。

どうして葉蔵はこの時シゲ子に対して恐怖したのか。シゲ子は「本当の」父親が欲しいと言ひ、それに葉蔵は目まいを引き起こす程の衝撃を受けている。ここで目を向けるべきは、この頃の生活において、この親子と暮らす葉蔵は何者であったかという疑問であろう。それは当初は「気のきくおじさん」程度でしかなかった他人であり、「本当の」という言葉に対応させるならば偽物の父親であったのだ。

さらに言えば、葉蔵の抱える人間恐怖は自身が演じる「道化」を見破られる事でも触発され得る事にも着目しておこう。中学時代の竹一や、心中事件後の取調官に自身の「道化」を見破られた時、葉蔵が「地獄に蹴落とされた」思いをした事は無視出来ない。この場面においても、葉蔵はシゲ子が発した「本当」を望む言葉の裏に、自身の「道化」を暴き出そうとする獣の如き恐怖を感じたと解釈すべきであろう。

ところで、一体このシゲ子が発した「本当の」父親とは何を指していたのか。シゲ子は葉蔵を「お父ちゃん」と呼び慕ひ、周囲の人々からも葉蔵が「いいひと」だと聞いていた無邪気な少女だった。ならばシゲ子は葉蔵に「本当の」父親になって欲しかったのだと解釈してしまっても良いのではなかろうか。シヅ子と葉蔵が正式な夫婦となれば自分に「本当の」父親が出来る。葉蔵を素直に「お父ちゃん」と呼び慕うこの幼い少女はそう願っていたのではないか。

では、ここで葉蔵が感じた恐怖を更に一段深く解釈してみよう。この前後の記述においてシゲ子の願い事と葉蔵の淡い願望が食い違っている事に注目しておきたい。先述した引用を再び使うが、葉蔵はシヅ子からの懇意に対して以下のように思っていた。

シヅ子に、そのほかさまざまの事を言われて、おだてられても、それが即ち男めかけのけがらわしい特質なのだ、と思えば、それこそいいよ「沈む」ばかりで、一向に元気が出ず、女よりは金、とにかくシヅ子からのがれて自活したいとひそかに念じ、工夫しているものの、かえってだんだんシヅ子にたよらなければならぬ破目になって、家出の後仕末やら何やら、ほとんど全部、この男まさりの甲州女の世話を受け、いっそう自分は、シヅ子に対し、所謂「おどおど」しなければならぬ結

果になったのです。(p453)

女よりは金。この時期の葉蔵にとっては女よりも金と共に生きていたい事がより強調されている。結果的に心は満たされなかったものの、葉蔵は女と共に暮らす事は望んではいなかった。その証拠に、ツネ子やこの後の人生で出会う事になるヨシ子とは違って、葉蔵が自らこの親子に好意を示している描写はほぼ見受けられないそんな時に自分を招き入れようとするシゲ子の発言は、「人間」を恐れていた彼にとっては逃げ出したくなる程の恐怖であったのだ。

この恐怖についてはもう一つ追加したい観点がある。ここで望まれているのが「父親」になる事である点にも注目しておきたい。祈りについての会話にこんな箇所がある。

「お父ちゃん。お祈りをすると、神様が、何でも下さるって、ほんとう？」

自分こそ、そのお祈りをしたいと思いました。

ああ、われに冷き意志を与え給え。われに、「人間」の本質を知らしめ給え。

人が人を押しのけても、罪ならずや。われに、怒りのマスクを与え給え。

「うん、そう。シゲちゃんには何でも下さるだろうけれども、お父ちゃんには、駄目かも知れない」

自分は神にさえ、おびえていました。神の愛は信ぜられず、神の罰だけを信じているのです。信仰。それは、ただ神の^{むち}咎を受けるために、うなだれて審判の台に向う事のような気がして居るのです。地獄は信ぜられても、天国の存在は、どうしても信ぜられなかったのです。

「どうして、ダメなの？」

「親の言いつけに、そむいたから」(p454)

人間だけでなく神にさえも怯える葉蔵は「神の罰」だけは信じていた。第一章で参照した安藤宏氏の解釈を借りるならば、葉蔵は自分を裁いてくれる“誰か”という存在を「神」に求めていると言えるのだろうが、その理由を「親の言いつけに、そむいたから」としている。東郷克美氏も「「神」の代替品として父親が描かれている」と述べているが、葉蔵が親の存在を口にするのは単に「神」の罰を求めるという観念的な問題に留まらない。さらに注意すべきは父親の存在が葉蔵の実生活においても、彼の人生に根幹的に関わってきた点であろう。よって、ここで父親の存在について改めて確認しておきたい。

そもそも葉蔵の父親に対する態度はどうであったか。最も如実に表している場面を挙げよう。葉蔵の幼少期の頃が多く書かれた「第一の手記」に父親が東京の土産を買ってくる話を家族でしている場面がある。そこで父親が東京で買ってくる土産の要望を葉蔵に聞くが、葉蔵は欲しい物が答えられずに口籠ってしまう。結局その会話は父と長兄によって一方的に決められてしまうわけだが、

「やはり、本か。浅草の仲店にお正月の獅子舞いのお獅子、子供がかぶって遊ぶのには手頃な大きさのが売っていたけど、欲しくないか」

欲しくないか、と言われると、もうダメなんです。お道化た返事も何も出来やしないんです。お道化役者は、完全に落第でした。

「本が、いいでしょう」

長兄は、まじめな顔をして言いました。

「そうか」

父は、興覚め顔に手帖に書きとめもせず、パチと手帖を閉じました。

何という失敗、自分は父を怒らせた、父の復讐は、きっと、おそろべきものに違いない、いまのうちに何とかして取りかえしのつかぬものか、とその夜、蒲団の中でがたがた震え (p388)

これは葉蔵の人間恐怖と人間不信が父親も例外でない事を示しているのだが、それ以上に「父を怒らせた」事から始まる、葉蔵の「怒り」という感情に対する考え方が重要なのである。

自分は怒っている人間の顔に、獅子よりも鰐よりも竜よりも、もっとおそろしい動物の本性を見るのです。ふだんは、その本性をかくしているようですけども、何かの機会に、たとえば、牛が草原でおっとりした形で寝ていて、突如、尻尾でピシッと腹の蛇を打ち殺すみたいに、不意に人間のおそろしい正体を、怒りに依って暴露する様子を見て、自分はいつも髪の逆立つほどの戦慄を覚え (p386)

葉蔵は「怒り」に対して言及する時、人間ではなく「動物」という言葉を使う。¹⁸人間恐怖を動物に喩えて描き出す表現は手記の中でも要所要所で目にする葉蔵の手法であるのだが、さらに「もっとおそろしい」と表現する事によって、「人間」への恐怖がどれ程深く大きいかが強調している。後述する「世間」を個人に還元する思想をこの時点では持たない葉蔵にとっては、父親とは、「わからない」と重ね重ね訴えてきた「世間」の代表的存在のように思っていたのであろう。¹⁹そのため、葉蔵は父親を恐れるために父の意向にそぐわない行動をしてしまった事を強く後悔した。その後なんとか父の機嫌を取ろうとした事²⁰

¹⁸動物表現を観点とした先行研究としては、青木京子『『人間失格』の構成—＜動物＞表現の方法—』（愛知文教大学比較文化研究（11）愛知文教大学国際文化学会、2011年）が挙げられる。

¹⁹ 菊田義孝は著書『人間脱出—太宰治論』（彌生書房、1979年）において、父親を「世間そのもの、あるいは社会秩序そのものの象徴、というより、その権威の肉体的な具現者」という言葉で表現している。

²⁰ このやり取りの夜に、葉蔵は客間に忍び込んで父の手帖にこっそり「シシマイ」と書く

からも、葉蔵にとって父親とは身近な存在であり、同時に逆らう事の出来ない絶対的存在であった。

この事から分かるように、葉蔵にとって親に背く事は「神」からの罰を覚悟しなければならぬ程重大な背信であった。それにもかかわらず、父親の言いつけに背いてしまったという事実²¹は、それこそ「神の罰」とまで言う程の後悔となって葉蔵に押し掛かっていたのである。

このように「父親」を恐れる葉蔵は自身がその立場になる事に耐えられるはずもない。だからこそ、そのような願い事をしてきたシゲ子を恐れる結果になってしまったのである。「不意に虻を叩き殺す牛のしっぽ」という人間を動物に例える表現を再び使っている共通点からも、葉蔵の人間恐怖が如実に表れているのは明らかであろう。

この後、再び葉蔵の所に訪ねてくるようになった堀木との会話を経て「世間」を個人に還元した葉蔵はいくらか粗暴な性格になる。さらには外出先で飲み明かし、シヅ子のアパートに帰ってくる事も減っていった。

自分の飲酒は、次第に量がふえて来ました。高円寺駅附近だけでなく、新宿、銀座のほうにまで出かけて飲み、外泊する事さえあり、ただもう「慣例」^{しきたり}に従わぬよう、バアで無頼漢の振りをしたり、片端からキスしたり、つまり、また、あの情死以前の、いや、あの頃よりさらに荒んで野卑な酒飲みになり、金に窮して、シヅ子の衣類を持ち出すほどになりました。(p460)

この一時期において人間への不信と恐怖を気にしなくなり、利己的に振る舞うようになった葉蔵であったが、ここで彼は再度「幸福」の問題に直面する事になる。ある日葉蔵は飲み続けた帰りにシヅ子のアパートへ足を運んだ際、シヅ子とシゲ子の会話を聞き、幸福について思いを巡らせる。

「なぜ、お酒を飲むの？」

「お父ちゃんはね、お酒を好きで飲んでいるのでは、ないんですよ。あんまりいいひとだから、だから、……」

「いいひとは、お酒を飲むの？」

「そうでもないけど、……」

「お父ちゃんは、きっと、びっくりするわね」

「おきらいかも知れない。ほら、ほら、箱から飛び出した」

「セッカチピンチャンみたいね」

という危険を冒して父親の機嫌を取る事に成功した。

²¹葉蔵は東京に進学する際に、父親が自分を「官吏にするつもり」だった事を伝えられているが、シヅ子達との生活がその道からは大きく外れている事は明らかであろう。

「そうねえ」

シヅ子の、しんから幸福そうな低い笑い声が聞えました。

自分が、ドアを細くあけて中をのぞいて見ますと、白兎の子でした。ぴょんぴょん部屋中を、はね廻り、親子はそれを追っていました。

（幸福なんだ、この人たちは。自分という馬鹿者が、この二人のあいだにはいって、いまに二人を滅茶苦茶にするのだ。つつましい幸福。いい親子。幸福を、ああ、もし神様が、自分のような者の祈りでも聞いてくれるなら、いちどだけ、生涯にいちどだけでいい、祈る）

自分は、そこにうずくまって合掌したい気持でした。そっと、ドアを閉め、自分は、また銀座に行き、それっきり、そのアパートには帰りませんでした。(p460~461)

ツネ子との関係で、生涯に一度だけしか使うつもりはないと言っていた「幸福」という言葉。確かに自分の心情として直接的に述べているわけではないが、ここで葉蔵は「幸福」を「祈る」という行為をする。では、ここで葉蔵が「幸福」を祈った事がどんな意味を持つのか。葉蔵のこの行為について木村純二氏²²は以下のように述べている。

作品の「あとがき」の章で、「京橋のスタンド・バアのマダム」によって「神様みたいないい子」と語られる葉蔵が、人知れずその優しさを発した場面である。

ここでは、「親子」の「つつましい幸福」が肯定されてはいるが、やはり主眼となっているのは、その「幸福」を心から祈りつつ、それを「無茶苦茶」にしないために、みずから身を隠す主人公の心の在りようであろう。この「生涯にいちどだけ」という「祈り」は、主人公葉蔵が、物語の冒頭から人間の「プラクテカル」な営みに適応できず、とりわけ家庭において、苦しさや恐ろしさ、気まずさなどを覚えるキャラクターとして描かれてきたことによって、より強く読者に印象付けられるものとなっている。葉蔵はちょうど「人間を極度に恐れていながら、それでいて、人間を、そうしても思い切れなかった」と語られていたように、家庭の「つつましい幸福」を心の底では希求しつつも、自分の手に届かないものとしてかなたに置き、あくまで憧れに留めておくのである。

葉蔵の優しさの発露だと木村は述べており、葉蔵の心の在りようは「つつましい幸福」への「あこがれ」であるとしている。だが、この時の葉蔵の心のありようを「優しさ」や「あこがれ」という言葉で捉えて良いものであろうか。前述したように、葉蔵はシヅ子やシゲ子に対して好意を示している描写は全くと言っていい程に少ない。むしろ「自分という馬鹿者」と自身を卑下する葉蔵の語り口や、木村の解釈に使われた「自分の手に届かないものとして

²²木村純二「太宰治における「芸術家」の位相 ―「奉仕」としての創作活動―」（一般財団法人ホモコントリビュエンス研究所ウェブサイト、2011年）

かなたに置」くという在り方に目を向けるべきだろう。²³手記の言葉に根拠を見出すとするならば、「世間」一般からすると尊いものであろう親子の団欒から距離を置いてしまう葉蔵のこういった気質は、以下の発言と共に語られるべきである。

「そう？ お父ちゃんはとてもいいひとだって、みんな言うけどな」

それは、だましているからだ、このアパートの人たち皆に、自分が好意を示されているのは、自分も知っている、しかし、自分は、どれほど皆を恐怖しているか、恐怖すればするほど好かれ、そうして、こちらは好かれると好かれるほど恐怖し、皆から離れて行かねばならぬ、この不幸な病癖を、シゲ子に説明して聞かせるのは、至難の事でした。(p454~455)

相手が自分に好意を持っている事は知っている。しかし自分は相手を恐れている。この矛盾を隠そうと例の「道化」で誤魔化しを続けるが、それが却ってこの矛盾を拡大させてしまうという悪循環に陥ってしまう。シヅ子の好意に甘える事から始まったこの生活の精神的困窮は、葉蔵が語るところの「不幸な病癖」であるのだ。

「いい親子」について祈った「幸福」は「この二人」のことしか指していない。シゲ子との会話の箇所でも確認した通り、葉蔵は好いてくれている相手の事を彼の方から積極的に好いていない。そんな自分がこの二人の中に居たら、いつかは「不意に蛇を叩き殺す牛のしっぽ」に傷つけられてしまうという恐怖を感じずにはいられない。シゲ子ですら敵であるかもしれないと疑う彼は、自分の居る現状をその親子の「幸福」だとは思えずに自ら身を引いたのである。ツネ子との「幸福」は一夜限りしか続かなかった葉蔵だが、ここでは「幸福」が始まる前から逃避をしてしまっている。それどころか、ツネ子との関係においての「幸福」は自分とツネ子との二者間で成立していたのに比べ、このシヅ子シゲ子親子との関係では自分が「幸福」に関わってすらいらない事が根底にあったのである。幸福そうな親子の間に自分が入ってはいけない、なぜならばその瞬間に「自分という馬鹿者」によって二人の幸福が崩れ去ってしまう。

ではここにどんな理屈を読み取ればいいのか。着目すべき点は、葉蔵の「いちどだけ」という言葉であろう。彼の「祈り」はその親子の「幸福」を「生涯にいちどだけ」祈っている。これまでの手記の中で、「幸福」について生涯で「いちどだけ」という表現を使う事によって想起される場面がある。それは「第二の手記」でツネ子と一夜過ごしたあの場面ではなかろうか。ここにおいて葉蔵と「幸福」の関係はツネ子の時と同じ理屈を持ってくる。つまりこの場面において葉蔵がシヅ子シゲ子親子の「幸福」を祈る事によって、彼の「幸福」についての価値観とそれとの距離感が示されてくるのだ。葉蔵は自分を決して他者の「幸福」

²³ 木村の言葉をそのまま利用させてもらったが、本論考においては「自分の手に届かないもの」としてかなたに置」く葉蔵の在り方を家庭の「つつましい幸福」への憧れと共に論じない点において木村の解釈との差別化を図っている。

の内側に置きたがらない。自分が居る事によってその親子の「幸福」が生み出されたにもかかわらず、相手が望んでいる「幸福」らしい事からひたすら自分を遠のかせるという手法によって自分の在り方を定義して行くのである。この親子との関係が終わる時点での「幸福」とは、字義とは裏腹に葉蔵を恐怖に近づける要素でしかない。常に自分を排斥していく事でしか自分の存在を語れない葉蔵の精神的困窮を表した「不幸な病癖」という言葉に呼応する形で述べるならば、「病」を誘発する毒素として捉えられていたのだ。

第三章 葉蔵と女達②

第一節 葉蔵とヨシ子

シヅ子の所から逃げ出した葉蔵は、京橋のスタンド・バアのマダムにすがり、一時その二階に転がり込んだ。この頃の葉蔵は、まだまだ人間への不信と恐怖が残っていたとはいえ、シヅ子のアパートに居た時よりも更に酒を飲み、漫画や絵も低俗なものを描いていた。これはシヅ子との生活が終わる頃、堀木との会話で「世間とは個人じゃないか」と「世間」を個人に還元した事が大きく、葉蔵は世の中に対しての警戒心を緩めていた。

この直後、葉蔵はヨシ子と出会うのだが、今まで親交を深めた女達の中でも、内縁の妻となるまでに関係が進んだのはこのヨシ子だけである。しかし、このヨシ子の位置付け、意味付けをする時、注意すべきはヨシ子が手記に登場する直前の葉蔵の在り方だという事を先に述べておきたい。上述した通り、ヨシ子と出会う前の葉蔵は人間恐怖を「世間」と「個人」の同化によって軽減していたが、完全な解消には至っておらず、「多少解放」されたと語っている。その生活を表しているのが以下の箇所であろう。

漫画家。ああ、しかし、自分は、大きな^{よろこび}歓楽も、また、大きな^{かなしみ}悲哀もない無名の漫画家。いかに大きな悲哀があとでやって来てもいい、荒っぽい大きな歓楽が欲しいと内心あせってはいても、自分の現在のよろこびたるや、お客とむだ事を言い合い、お客の酒を飲む事だけでした。(p464)

態々この引用をしたのには勿論理由がある。それは、これから論述していく上で、「いかに大きな悲哀があとでやって来てもいい」という言葉を意識しておく必要があったからである。また、この時の葉蔵は「内心あせって」いた事にも着目しておいて良いだろう。自分は未だに無名の漫画家であり、そういう大きな喜びも悲しみも知らずに生きているのだ。そういう「くだらない生活」を一年近く続けていた時に、葉蔵に酒をやめるように言ってくるという形でヨシ子は現れた。年明けの厳寒の夜、葉蔵はヨシ子に、自分が酒を明日からやめたら結婚しようと冗談を言うが、ヨシ子はそれに「モチよ」(p469)と即答する。翌日、昼から酒を飲んだ葉蔵がその事を謝るものの、ヨシ子は葉蔵を信じて疑わない。これらの情報を念頭に置いて、葉蔵がヨシ子との結婚を決意した時の言葉を確認するとしてよう。

薄暗い店の中に坐って微笑しているヨシちゃんの白い顔、ああ、よごれを知らぬヴァジニティは尊いものだ、自分は今まで、自分よりも若い処女と寝た事がない、結婚しよう、どんな大きな^{かなしみ}悲哀がそのために後からやって来てもよい、荒っぽいほどの大きな^{よろこび}歓楽を、生涯にいちどでいい、処女性の美しさとは、それは馬鹿な詩人の甘い感傷の幻に過ぎぬと思っていたけれども、やはりこの世の中に生きて在るも

のだ、結婚して春になったら二人で自転車で青葉の滝を見に行こう、と、その場で決意し、所謂「一本勝負」で、その花を盗むのにためらう事をしませんでした。

(p470)

注目しておきたい言葉は「どんな大きな悲哀がそのために後からやって来てもよい」という箇所である。この言葉は（少しの違いはあるものの）葉蔵がヨシ子と出会う前に述べていた「あせり」の内容と一致しており、ヨシ子と出会う前と出会った後、合わせて二度目の描写となる。この「あせり」は、後から大きな悲しみに見舞われようと大きな喜びが欲しいという葉蔵の精神的渴望を表現していると解釈出来るわけだが、そのタイミングを見計らったようにヨシ子は登場してくる。このタイミングに手記の恣意的要素を見て取るのは簡単だが、肝心なのは葉蔵がツネ子の時と同様、ヨシ子の人格と向き合っているのではなく、ヨシ子から見出した性質と付き合っている点である。

あの煙草屋のヨシ子を内縁の妻にする事が出来て、そうして築地、隅田川の近く、木造の二階建ての小さいアパートの階下の一室を借り、二人で住み、酒はやめて、そろそろ自分の定まった職業になりかけて来た漫画の仕事に精を出し、夕食後は二人で映画を見に出かけ、帰りには、喫茶店などにはいり、また、花の鉢を買ったりして、いや、それよりも自分をしんから信頼してくれているこの小さい花嫁の言葉を聞き、動作を見ているのが楽しく、これは自分もひょっとしたら、いまにだんだん人間らしいものになる事が出来て、悲惨な死に方などせずにはすむのではなかろうかという甘い思い (p471)

この箇所と前の引用も併せ、葉蔵がヨシ子に見出していたのは「処女性の美しさ」と自分への「しんから」の「信頼」であろう。だが、この二つの美質は葉蔵とヨシ子の双方向的関係の中で見出していったものではなく、葉蔵がヨシ子に対して一方的な意味付けを付加していく語りの中で生み出されていったものである。ヨシ子との生活をこれまでの女性達との対比の中で考えて行くと、当然共通点と相違点があるのだが、それらは葉蔵にとって望ましい事が多い点に注目しておきたい。確認になるのだが、ツネ子との生活は相手への好意があったが、金が無かったために実現出来なかった。逆にシヅ子シゲ子親子との生活では金は稼げていたものの、相手への自発的な好意が持てずに逃げ出してしまった。だがこのヨシ子との生活はどうであろう。金は「定まった職業になりかけて来た漫画の仕事」で稼げている。ヨシ子への好意は内縁の妻にしたという行為自体や見ていて「楽しい」と思っている事、そして何より「青葉の滝」のような信頼心という美質へ惹かれている事から間違いなく持っていた。つまり実生活の面でも精神的な面においても、ヨシ子との結婚生活は、これまでの女性達との交わりの中では最も彼にとって恵まれていた時間だったと解釈出来るだろう。

しかし、そんな葉蔵を裏切る事件を境に、二人の結婚生活は崩壊する。久しぶりに再会し

た堀木と葉蔵が喜劇名詞、悲劇名詞、対義語の当てっこをしている裏で、ヨシ子が商人に犯されるという凄惨な事件によって葉蔵とヨシ子の間に決定的な亀裂が生じてしまう。

ここで改めて事件の前後も含めて考えて行く。手記の言葉は、この結婚生活がいつまでも続かないどころか、明らかに破滅に向かっていく事を予想させるように綴られている。それは結婚を決意した直後の箇所である。

そうして自分たちは、やがて結婚して、それに依って得た^{よろこび}歓楽は、必ずしも大きくはありませんでしたが、その後に来た^{かなしみ}悲哀は、^{せいさん}凄惨と言っても足りないくらい、実に想像を絶して、大きくやって来ました。自分にとって、「世の中」は、やはり底知れず、おそろしいところでした。決して、そんな一本勝負などで、何から何まできまってしまうような、なまやさしいところでも無かったのです。(p470)

これは葉蔵が結婚を決意した直後に書かれた言葉であるが、この時点でヨシ子の悲劇が先取りされる形で語られている事は重要であろう。ここでヨシ子が汚される悲劇は、必然的に手記に盛り込まれていると読むべきである。なぜならば、ここで手記の語り手（晩年の大庭葉蔵）が描き出そうとしているのは、多少なりとも恐れる事をやめた「世の中」に再び打ちのめされる展開だからだ。高田知波氏が述べるように、葉蔵の関心は事件そのものではなく、その意味付けにこそ置かれている。²⁴すなわち、ヨシ子は葉蔵が「世の中」に手痛いしっぺ返しを受ける直接的なきっかけを作る犠牲となる存在として手記の中に登場させられているのである。

再度強調しておくが、葉蔵はヨシ子に対して人格的な付き合いをしていない。葉蔵は人格としてのヨシ子に惚れたのではなく、むしろ観念としての「処女性」、尊い「ヴァジニティ」に惚れたのである。これに関しては塚越和夫氏がそれまでの研究を踏まえた上で、「彼は「ヴァジニティ」と結婚したのであって、ヨシ子と結婚したのではなかった。彼は「無垢の信頼心」を愛したのであって、ヨシ子その人を愛したのではなかった。」²⁵と指摘している通りである。ヨシ子の登場の場面が「処女がいました」と語られている事からも、これは明らかであろう。この美質と結婚した葉蔵にとって、この事件はその「ヴァジニティ」が犯された事に他ならない。それは葉蔵にとってはヨシ子本人が受けた傷よりも重要なのである。「ヨシ子が汚されたという事よりも、ヨシ子の信頼が汚されたという事が、自分にとってそのうち永く、生きておられないほどの苦悩の種になりました。」(p482) と語る葉蔵の心理はこの一点においてのみ重傷を負っている。ならばこれらの要素を含めて考えた時、ヨシ子の美質が汚される事は葉蔵に何をもたらしたのか。それは端的に言ってしまうと自己喪失のプロセス、その第一歩である。

²⁴高田知波『『人間失格』と＜葉蔵物語＞』（『駒沢国文』31 駒沢大学、1994年）

²⁵塚越和夫「人間失格論」（文学批評の会編『批評と研究 太宰治』芳賀書店、1972年）所収

ヨシ子の「処女性」や「信頼心」は手記において何度も繰り返し尊いものとして語られている。

自分のような、いやらしくおどおどして、ひとの顔いろばかり伺い、人を信じる能力が、ひび割れてしまっているものにとって、ヨシ子の無垢の信頼心は、それこそ青葉の滝のようにすがすがしく思われていたのです。それが一夜で、黄色い汚水に変ってしまいました。見よ、ヨシ子は、その夜から自分の一顰一笑にさえ気を遣うようになりました。(p482)

そのために自分の眉間は、まっこうから割られ声が嘎れて若白髪がはじまり、ヨシ子は一生おろおろしなければならなくなったのです。【中略】考えると何もかも自分がわるいような気がして来て、怒るところか、おごと一つも言えず、また、その妻は、その所有している稀な美質に依って犯されたのです。しかも、その美質は、夫のかねてあこがれの、無垢の信頼心というたまらなく可憐なものなのでした。(p483~484)

この二つの引用が最も葉蔵のヨシ子の美質に対する執着と、その崩壊による自身への衝撃を読み取れるだろう。ヨシ子の美質は葉蔵にとって自身の存在を賭けるに値するほどに大きなものであった。小林美恵子氏はその事を、

ヨシ子の「無垢の信頼心」は、葉蔵にとって「人間」界につながる唯一の糸だったのである。周囲の何もかもに軽蔑され、憎悪されているかのような怯えに苛まれて孤独に人生を送ってきた葉蔵にとって、自分を全肯定するヨシ子の存在は、たった一つの、しかし大きな支えだったに違いない。²⁶

と述べている。葉蔵のような人生を送ってきた人間にとってはヨシ子は「青葉の滝」のように清い存在であり「かねて」から「あこがれ」ていた待ち望んでいた存在であった。そのヨシ子が犯された事件は、言うなれば葉蔵自身へのヨシ子を通した「世の中」からの襲撃なのだ。ヨシ子の美質が汚されたという事実を言い換えるならば、葉蔵のヨシ子に対する過大な幻想の崩壊²⁷である。彼の人生が徐々に、しかし確実に崩壊して行く直接的なきっかけとな

²⁶ 小林美恵子『『人間失格』の女たち―「人間」葉蔵の語り部たち』（『国文学 解釈と鑑賞』72（11）至文堂、2007年）

²⁷ この崩壊に関しては、饗庭孝男氏が著書『太宰治論』（小沢書店、1997年）の中で作者太宰の精神史と共に論じている事も提示しておく。饗庭はツネ子、シヅ子、マダムら年上の女性達を母性的存在、すなわち無限に赦しを与える存在として描き、それに対してヨシ子を無限に純潔な存在であるとする太宰における女性像の二極化を述べており、この二極化そのものが太宰にとってまともな女性像を作る事を困難にした理由であるとしている。

ったのはこういう理屈であった。

ヨシ子の事件が葉蔵の自己喪失へと繋がるという論旨を強調するために、さらに注目しておきたいのが葉蔵の実生活における行動面の変化である。ヨシ子が犯されてからは、葉蔵の職業であった漫画の画風の変化が訪れる。

唯一のたのみの美質にさえ、疑惑を抱き、自分は、もはや何もかも、わけがわからなくなり、おもむくところは、ただアルコールだけになりました。自分の顔の表情は極度にいやしくなり、朝から焼酎を飲み、歯がぼろぼろに欠けて、漫画もほとんど猥画に近いものを画くようになりました。いいえ、はっきり言います。自分はその頃から、春画のコピーをして密売しました。焼酎を買うお金がほしかったのです。

(p484)

この箇所はヨシ子の美質にすら疑いを向け、アルコールによって現実から逃避する語り手の姿を描き出しており、漫画の内容や春画のコピーもそのための手段なのだと解釈出来る。しかしここで真に着目すべきはこの画風と行為そのものである事を主張しておこう。思い出してほしいのは、シヅ子との生活で葉蔵が漫画家を職業にする場面である。葉蔵がなりたっていたのは「画家」であるのに、実際に仕事として定着したのは漫画家で、本当は漫画などではなく、あの中学時代の「自画像」を見せてやりたかったのだ。ありのままの自分の姿を描いた中学時代の「自画像」は「失われた傑作」であり、それを思い出す度に葉蔵は永遠に拭いがたい「喪失感」を感じている。東郷克美氏は聖化されたヨシ子が汚されるのと、漫画の画風の変化は、共に自己実現の最終的な願いの崩壊²⁸だと述べているが、加えて本論考では「コピー」という行為自体にも目を向けておこう。コピーとは文字通り自力以外の模倣であって、これは葉蔵の中には既に自己と呼べるものが残っていない事を如実に表していると考える事が出来ないだろうか。この事件は、葉蔵がそれまで持っていた美質への「あこがれ」という自己と、芸術における自己の二つをまとめて喪失してしまったからこそ「決定的」であったのだ。

ヨシ子との結婚生活の崩壊が葉蔵の自己喪失だと述べたが、これをヨシ子との関係における葉蔵の「幸福」を論じるために最も重要な視点であった事をこれから明らかにする。予め念を押しておくが、ヨシ子との結婚生活において「幸福」という観点からの議論は一つのピークを迎える。そのために本論考が試みるのは、葉蔵が使った「一本勝負」という言葉からの解釈である。

この言葉はヨシ子との結婚を躊躇する事無く決意した場面においても葉蔵が使った言葉であるのだが、まず初めにこの「一本勝負」という言葉が手記の中でどう使われたのか注目したい。最初に葉蔵がこの言葉を用いるのはシヅ子との同棲生活から逃げ出した直後であ

²⁸東郷克美「「人間失格」の渴仰」（東郷克美・渡部芳紀編『作品論 太宰治』双文社出版、1976年）

る。葉蔵は京橋のスタンド・バアのマダムに、「わかれて来た」の一言だけで自身の現状を受け入れてもらった事からこの言葉を使い出す。その時の理屈が以下に引用する箇所であるが、この直前に葉蔵が「世間」を個人に還元していた事に留意して確認してもらいたい。

世間。どうやら自分にも、それがぼんやりわかりかけて来たような気がしていました。個人と個人の争いで、しかも、その場の争いで、しかも、その場で勝てばいいのだ、人間は決して人間に服従しない、奴隷でさえ奴隷らしい卑屈なシッペがえしをするものだ、だから、人間にはその場の一本勝負にたよる他、生き伸びる工夫がつかぬのだ、大義名分らしいものを称えていながら、努力の目標は必ず個人、個人を乗り越えてまた個人、世間の難解は、個人の難解、^{オーシャン}大洋は世間でなくて、個人なのだ、と世の中という大海の幻影におびえる事から、多少解放せられて、以前ほど、あれこれと際限の無い心遣いする事なく、謂わば差し当っての必要に応じて、いくぶん図々しく振舞う事を覚えて来たのです。

高円寺のアパートを捨て、京橋のスタンド・バアのマダムに、
「わかれて来た」

それだけ言って、それで充分、つまり一本勝負はきまって、その夜から、自分は乱暴にもその二階に泊り込む事になったのですが、しかし、おそろしい筈の「世間」は、自分に何の危害も加えませんでしたし、また自分も「世間」に対して何の弁明もしませんでした。マダムが、その気だったら、それですべてがいいのでした。(p461~462、傍点は原文通り)

これが葉蔵の人間恐怖が一時的に緩和される根底の理屈となっている。この時を区切りに葉蔵が「世間」という言葉をカッコ付で使用している事からも、葉蔵が「世間」に対して自分なりに一応の向き合い方を導き出したのは読み取れる。しかしここでより目を向けるのは「一本勝負」の理屈によってそれらが導かれている点であろう。この「一本勝負」はマダムのバアに転がり込むのに「それで充分」であると語る程に葉蔵へ「世間」の在り方を納得させただけでなく、ヨシ子との結婚を躊躇う事無く決意する時にも使われている。「生涯にいちど」の「大きな歓楽」を得るために「どんな大きな悲哀」が来ても良いと覚悟して「一本勝負」を仕掛けたのである。つまり「一本勝負」とは、「世間」を個人に還元する事によって人間恐怖を和らげていた葉蔵にとっては、「世間」の個々人が「生き伸び」ている「工夫」の正体であり、ヨシ子の美質に惚れ込んだ葉蔵が結婚生活の美しさを語る際に用いた「悲惨な死に方」という言葉の対極として位置付けられるものであった。

また、ここまでの話を少し突き詰めれば、ヨシ子との結婚生活は前章で論じたシヅ子・シゲ子親子との生活と対比になっている事を読み取れるだろう。シヅ子のアパートから逃げ出す葉蔵は親子の「つつましい幸福」を祈っていたのだが、ヨシ子との結婚生活とは「世間」の理屈を「一本勝負」として受け入れた事で成立した。この手記に描かれる結婚生活は、シ

ヅ子・シゲ子親子に描かれた「つつましい幸福」と、「世間」一般に描かれる小市民的生活という点において類似する在り方として描かれていると解釈出来るのではなかろうか。

シヅ子・シゲ子親子の時は「つつましい幸福」という「世間」の理屈から逃げ出したのに対し、ヨシ子との結婚の決意は、「世間」の理屈の中で「人間らしいもの」として生きようとした決意という事になる。今まで葉蔵は、それまでの人生の中で繰り返し「人間」に対する疑念を持ちつつも、他者とのコミュニケーションにおいては「人間」らしく振る舞い、言わば理念と行動が一致していなかった。しかし、このヨシ子との結婚生活は、「一本勝負」という「世間」の理屈を自身の行動として実行した。つまり理念と行動が一致するという変化が起こったのである。これ程までに自身を再定義し直した葉蔵の「甘い思い」を「世間」は無情にも裏切った。

自分にとって、「世の中」は、やはり底知れず、おそろしいところでした。決して、そんな一本勝負などで、何から何まできまってしまうような、なまやさしいところでも無かったのです。（p470）

よって再びこの言葉を意識する必要があるだろう。ヨシ子の美質が汚された事を通して葉蔵自身も「世の中」（「世間」）から手痛いしっぺ返しを受けたのは先に述べたが、この「一本勝負」の論理からすれば、「生きておられないほどの苦悩の種」と表現する傷跡を残され、葉蔵は「世間」に負けたのである。この敗北は人間恐怖からそれまで自身を守ってくれていた「一本勝負」という防壁の崩落と同義であるために、人間恐怖が再燃するのは回避出来ない結果である。ヨシ子の事件現場に際して、「これもまた人間の姿だ」などと必死に自分を落ち着かせようと言い聞かせてみたところで、この「もの凄まじい恐怖」から逃れる事など出来ないのであった。

その後、葉蔵は人妻が犯された物語の本を色々と読んでみるが、それらの物語は夫が行為を許すか許さないかに重点が置かれていて、葉蔵の問題とは別の所に関心があるものばかりであった。

許す、許さぬ、そのような権利を留保している夫こそ幸いなる哉、とても許す事が出来ぬと思ったなら、何もそんなに大騒ぎせずとも、さっさと妻を離縁して、新しい妻を迎えたらどうだろう、それが出来なかったら、所謂「許して」我慢するさ、いずれにしても夫の気持一つで四方八方がまるく収まるだろうに、という気さえするのです。つまり、そのような事件は、たしかに夫にとって大いなるショックであっても、しかし、それは「ショック」であって、いつまでも尽きること無く打ち返し打ち寄せる波と違い、権利のある夫の怒りでもってどうにでも処理できるトラブルのように自分には思われたのです。けれども、自分たちの場合、夫に何の権利も無く（p483~484）

ここにおいて「幸いなる」夫の具体像を葉蔵は思い描くが、この事件は葉蔵が自己の喪失を意味する事は先述した通りである。仮に何事も無くそのまま二人の結婚生活が続き、葉蔵の人生が完結していたかもしれないという可能性を考慮すれば、この事件によって葉蔵とヨシ子の二人、特に、葉蔵にとっては「悲惨な死に方などせずすむ」可能性が奪われたという事になる。ヨシ子との結婚生活を幸せな結婚生活だとすると、自己の喪失によって「権利」を持つべき自己さえ失った葉蔵は「幸いなる」夫からは程遠い「不幸」な夫なのである。とすれば、葉蔵の自己喪失を「幸福」という観点から見ると、葉蔵が「幸福」へと至る可能性が断ち切られたと読み換えて良いだろう。

よってこれまでの議論を総括すると、葉蔵はヨシ子との結婚生活とその崩壊を通して、「あこがれ」という自己と、芸術における自己、そして「幸福」を受容するための自己という三つの側面において自己喪失をする結果となってしまったのだ。

第二節 葉蔵と不幸

ヨシ子との結婚生活の崩壊によって葉蔵は「人間らしいもの」になれるのではという「甘い思いを」裏切られ、「幸福」へと至る可能性ごと自己を喪失した。では「幸福」の反対である「不幸」はどうであろうか。葉蔵が三人の女達との関わり合いの中で「幸福」という言葉と向き合い、時には癒され、時には傷つけられた事はこれまで論じてきたが、ここで葉蔵と「不幸」について考えてゆく。ツネ子、シヅ子二人とヨシ子の章を別々に設けた理由は、葉蔵がこの「不幸」と向き合うのもヨシ子との結婚生活が崩壊した後だからだ。また、ヨシ子との結婚生活において「幸福」という観点からの議論は一つのピークを迎えると前節で述べたが、それは「不幸」という観点からの議論も同時に語られる事になるからでもある。

ヨシ子が犯された事件の後、東京に大雪の降った日の夜に喀血した葉蔵は「不幸」について、

不幸。この世には、さまざまの不幸な人が、いや、不幸な人ばかり、と言っても過言ではないでしょうが、しかし、その人たちの不幸は、所謂世間に対して堂々と抗議が出来、また「世間」もその人たちの抗議を容易に理解し同情します。しかし、自分の不幸は、すべて自分の罪悪からなので、誰にも抗議の仕様が無いし、また口ごもりながら一言でも抗議めいた事を言いかけると、ヒラメならずとも世間の人たち全部、よくもまあそんな口がきけたものだと思えかえるに違いないし、自分はいったい俗にいう「わがままもの」なのか、またはその反対に、気が弱すぎるのか、自分でもわけがわからないけれども、とにかく罪悪のかたまりらしいので、どこまでも自らどんどん不幸になるばかりで、防ぎ止める具体策など無いのです。(p488)

とかたり、自分の不幸は自身の罪惡から来ているものだと言っている。自身に原因があるが故に、自らが抗議をしようとしてもヒラメに代表される「世間」の人たちはそれを認めないに「違いない」という確信すら持っている。「わがままもの」かも気弱なのかも自分で理解出来ないものの、とにかく原因は自らの罪惡だと決めている。

この手記の記述から、何が葉蔵にとって「不幸」であるのか、なぜ葉蔵は「罪惡のかたまり」なのかと躍起になって葉蔵の「不幸」の中身を読み取ろうとするのは話が性急過ぎる。それは「わがままもの」かも気弱なのかも自分で理解出来ない、「不幸」に対して自分を揺らし続ける葉蔵の語りに踊らされていると言わざるを得ない。そうではなく、この箇所で大変な事は「不幸」を「世間」という外界に洩らさず、自身の内側においてのみ持ち続ける葉蔵の在り方、その一点だけである。よって、今すぐ「不幸」の正体を暴こうとはせず、この点を記憶に留めながら、先に進むとしよう。

葉蔵は咯血したのを見て、何か薬をと思い薬屋に入る。そこで葉蔵はその薬屋の女主人である未亡人の「奥さん」と出会う。

自分は立って、取り敢えず何か適当な薬をと思い、近くの薬屋にはいって、その奥さんと顔を見合せ、瞬間、奥さんは、フラッシュを浴びたみたいに首をあげ眼を見はり、棒立ちになりました。しかし、その見はった眼には、驚愕の色も嫌悪の色も無く、ほとんど救いを求めるような、慕うような色があらわれているのです。ああ、このひとも、きっと不幸な人なのだ、不幸な人は、ひとの不幸にも敏感なものなのだから、と思った時、ふと、その奥さんが松葉杖をついて危かしく立っているのに気がつきました。駆け寄りたいたい思いを抑えて、なおもその奥さんと顔を見合せているうちに涙が出て来ました。すると、奥さんの大きい眼からも、涙がぼろぼろとあふれて出ました。(p489)

この時の葉蔵は「不幸」をこの女主人と共感と呼んでいい程に感じ取っている。逆から考えれば、この時の葉蔵にはまだ「不幸」というものが具体的な内容として持つ持たないにかかわらず、観念としてはまだ持ち合わせていたと読む事が出来よう。ここで女主人という「女」と葉蔵は関わりを持つ事になるのだが、ヨシ子と同様に「女」という事ではなく、この時女主人から酒を止めるための最後の手段として渡されたモルヒネの注射液の方に価値が置かれている。むしろこの女主人とは薬のためだけに「醜関係」を結んだと明記している分、ヨシ子の時以上に人格との付き合いをしていないと言えるだろう。薬に頼る事になって以降、これまでのように春画のコピーなどに頼らなくても葉蔵の漫画家としての仕事は大いにはかどり、「自分で画きながら噴き出してしまうほど珍妙な趣向が生まれる」程になる。もちろんこれは薬（モルヒネ）のおかげである事は言うまでも無いのだが、ここで注目したいのは薬を求め、女主人へ頼み込んだ発言だ。

「薬が無いと仕事がちっとも、はかどらないんだよ。僕には、あれは強精剤みたいなものなんだ」

「それじゃ、いっそ、ホルモン注射がいいでしょう」

「ばかにしちゃいけません。お酒か、そうでなければ、あの薬か、どっちかで無ければ仕事が出来ないんだ」

「お酒は、いけません」

「そうでしょう？ 僕はね、あの薬を使うようになってから、お酒は一滴も飲まなかった。おかげで、からだの調子が、とてもいいんだ。僕だって、いつまでも、下手くそな漫画などをかいているつもりは無い、これから、酒をやめて、からだを直して、勉強して、きっと偉い絵画きになって見せる。いまが大事なところなんだ。だからさ、ね、おねがい。キスしてあげようか」(p492)

「偉い絵画きになってみせる」という言葉を簡単に読み流してはいけない。忘れてはいけないのが、葉蔵がヨシ子の事件で失くしたはずの「芸術家」としての自己を目標として掲げている点である。ヨシ子が汚された事で信じた女的美質への「あこがれ」と「幸福」へ到るための自己は既に失くしてしまった葉蔵だが、この時は薬に頼る事で、危ういながらも「芸術家」としての自己は取り戻していたのだ。

芸術と葉蔵の自己喪失の関連はヨシ子との結婚生活の時にも述べたが、葉蔵にとってなぜこれほどまでに絵を画く事が大きな問題となるかは、やはりあの竹一との交流の中で「画家」こそ「自分の生きて行く方向」だと悟った事に遡るのだろう。葉蔵の芸術家としての根底には未だにあの「失われた傑作」が棲みついているのだ。佐々木啓一氏はその事について以下のように論じた。

主人公は「あの絵」に絶対的な根拠を置いている。「画家」になること、そして「陰惨な絵」を描くことは、「自分の生きて行く方向」であり、自分の確かな存在意識と自己確認と保証だったのである。確かな対象を他者との関係によって求めることのできない対人恐怖の主人公にとっては、自己を対象化した何ものかに変えるしかないのである。それが「画家」なのである。

「画家」になることによって、いまの自己の修復と再起が可能なのである。「画家」になることは主人公の現実逃避ではない。主人公の人間存在の本質に関わることなのである。主人公が、世間の他者と関わって、その関係のなかで自己の存在を獲得する道は、「画家」になることでしか果たされない。従って、「画家」であることを媒介にして、他者との信頼の回復をはかろうとしたのである。「画家」になることによってのみ、自己の存在理由、つまり自立性を構築することができる。自己確立をはかるためには、自立を肩代わりしてくれる対象が求められる。その対象が

「画家」なのである。²⁹

自己の存在理由を懸けるためにも葉蔵は「絵を画く」事に死力を尽くす。葉蔵と絵の関わりは強調してもし過ぎる事は無いため、ここでもう一名、この事について端的に述べた萬所志保氏の論稿からも引用しておこう。

葉蔵は、竹一が述べたような絵画に描かれた「お化け」「妖怪」に、「道化」の裏側に潜在する本質的な「自分」の存在を垣間見る。そして画家の、自らの奥底に潜む闇から目を背けず追求し、それを「表現」する姿勢に、葉蔵は感銘し、「僕も画くよ。お化けの絵を画くよ。」と宣言する。この時、葉蔵ははじめて、「自分」を主体から把捉しようとする姿勢を見せるのである。³⁰

これら二名の研究は共に葉蔵の自己が「絵」を描くという点によって支えられてきた事を示しており、また、本論考においても前節で葉蔵の自己喪失は再三に渡って論じてきた。この芸術家としての自己確立のために葉蔵はモルヒネなどという薬にも依存していったのだ。

薬品もまた、焼酎同様、いや、それ以上に、いまわしく不潔なものだと、つくづく思い知った時には、既に自分は完全な中毒患者になっていました。真に、恥知らずの極みでした。自分はその薬品を得たいばかりに、またも春画のコピーをはじめ、そうして、あの薬屋の不具の奥さんと文字どおりの醜関係をさえ結びました。
(p493)

しかし葉蔵は気付けば中毒になっており、その時には既に薬のために春画のコピーを再開してしまい、薬という手段が目的になってしまっていた。そしてその薬という目的のための手段は春画のコピーという、再び、芸術に向き合う自己を喪失する行為であった。これはヨシ子との結婚生活が崩壊した後、酒を買うためにしていた事と同じであり、酒が薬に変わっただけである。ここにおいて最後の自己さえ完全に失う事になり、葉蔵の自己喪失は頂点を極める。

「死にたい」と思いながらも結局はアパートと薬屋を往復するだけの葉蔵はその状況を「地獄」と語る。直後、堀木、ヒラメ、ヨシ子によって彼は脳病院へ連れて行かれるのだが、その入院直前に

²⁹佐々木啓一『太宰治 演戯と空間』洋々社、1989年

³⁰萬所志保「太宰治「人間失格」試論―「私」という居場所―」(『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第7集、2002年)

ヒラメと堀木とヨシ子は、自分ひとりを置いて帰ることになりましたが、ヨシ子は着換の衣類をいれてある風呂敷包を自分に手渡し、それから黙って帯の間から注射器と使い残りのあの薬品を差し出しました。やはり、強精剤だとばかり思っていたのでしょうか。

「いや、もう要らない」

実に、珍しい事でした。すすめられて、それを拒否したのは、自分のそれまでの生涯に於いて、その時ただ一度、といっても過言でないくらいなのです。自分の不幸は、拒否の能力の無い者の不幸でした。すすめられて拒否すると、相手の心にも自分の心にも、永遠に修繕し得ない白々しいひび割れが出来るような恐怖におびやかされているのです。けれども、自分はその時、あれほど半狂乱になって求めているモルヒネを、実に自然に拒否しました。(p495)

このように「もう要らない」と発言し、自分の「不幸」を「拒否の能力の無い者の不幸」と意味付ける。しかし、ここで素直に手記の言葉を受け入れては見落としてはならない大事な点を見落としてしまう。手記の記述としてはいかにも葉蔵がこの時になって初めて自身の「不幸」を自覚したように語るのだが、真に注目すべきは「その時ただ一度」の拒否と共に「不幸」という言葉が使われている事である。このように特定の言葉を「ただ一度」という位置付けとともに用いている点から、ここに葉蔵のこれまでの人生で関わってきた女達との共通点が見て取れる事を見逃してはいけない。本論考のこれまでの考察を思い出してほしい。ツネ子と過ごした葉蔵が初めて、そして自身の心情としては最初で最後にもなるであろう「幸福」という言葉を使ったのは「再び無い」と語る程に「ただ一夜」限りの「大それた」事であったのだ。また、シヅ子・シゲ子親子との生活から逃げ出す時には、その親子の「幸福」を「生涯にいちどだけ」祈った。そして「生涯にいちどだけ」の「大きな歓楽」として決意したヨシ子との結婚生活において葉蔵は「幸いなる夫」になれる可能性を喪失した。つまり、葉蔵は「幸福」と「不幸」という言葉に対して、同じ使い方をしているという解釈がここで初めて可能になるのだ。こうして「幸福」と「不幸」が葉蔵の手記の中で同じ使われ方をしているという仕組みに気付いた時、葉蔵の自己喪失の問題が「幸福」と「不幸」の問題であった事が証明される。

そして今一度、葉蔵が脳病院の精神病棟に入院させられる場面に戻ろう。ヨシ子にモルヒネの注射器と薬品を差し出された時、「いや、もう要らない」と生涯に「その時ただ一度」の拒否をしてしまう。この拒否の言葉の「もう」という一語が何より象徴的なのである。これは時間の経過を意味する副詞だが、この時間経過は葉が必要なくなった事だけを意味するものではない。それは生涯に「その時ただ一度」の拒否を葉蔵が行った言葉であるという役割と共に論じられなければならない。自己喪失が「幸福」と「不幸」の両側面から語られるべきである事は先程証明してみせた通りであるが、これまで拒否をした事の無い葉蔵が「ただ一度」の拒否をした事により、葉蔵は「拒否の能力の無い者」としての「不幸」を失

った事になるのだ。この入院直前の瞬間において、葉蔵は自身の「幸福」と「不幸」、その両方を喪失してしまった。だからこそ、自己の存在確立へと繋がる「絵を描く」ために半狂乱になってまで求めていた葉は「もう」必要なくなったのである。

終章

終わりに

いまは自分には、幸福も不幸ありません。

ただ、一さいは過ぎて行きます。

自分がいままで阿鼻叫喚で生きて来た所謂「人間」の世界に於いて、たった一つ、真理らしく思われたのは、それだけでした。

ただ、一さいは過ぎて行きます。(p498)

ここまで考察を積み上げてきた事で、この論考はようやく最初の問題に戻ってくる事が出来た。本論考ではこれまでの議論を通して、葉蔵が女達との関わりの中で「幸福」、そして「不幸」という言葉とどのように出会い、それらの言葉を用いてきたかを述べてきた。ツネ子との「幸福」な一夜は、その一夜に限っては「幸福」を享受出来ていたのに、人間恐怖の根底からは抜け出せず、金が無い事も相俟って、心中という悲劇的な別れ方をしてしまった。シズ子との生活では親子の「つつましい幸福」を外側から「生涯にいちどだけ」祈り、自身はその内側には入ろうとせずに逃げ出してしまった。そしてやっと自分が信じられる「かねてあこがれ」ていた「美質」を持ったヨシ子との結婚をする。この時葉蔵は「人間らしいもの」になれるという「甘い思い」の中で、初めて理念としても実人生としても「幸福」を受け止める自己と向き合う事が出来た。そのヨシ子が「美質」ごと犯された事に端を発し、葉蔵は「幸福」も「不幸」も自己喪失として失ってしまった。ヨシ子との結婚生活の果てに「悲惨な死に方などせずに」すみ、「人間らしいもの」になる事に自身の「幸福」への希望を見出していた葉蔵は、その「人間らしいもの」、すなわち「所謂「人間」」になる事は終ぞ出来なかった。彼は女達との関わり合いの中で「幸福」も「不幸」もひっくるめて自己喪失を遂げたのである。手記に描かれる最晩年の大庭葉蔵が「いまは自分には、幸福も不幸ありません」「ただ、いっさいは過ぎて行きます」と語る言葉の裏にあったのは自己喪失としての意味付けであった。「真理らしく思われた」というその諦念めいた言葉も、あくまで「らしく」という言い方でしか語れない。「幸福」、そして「不幸」という自己存在を構成していたものを失った葉蔵に思考と呼べるものは存在し得ない。だからこそこの世の「ただ、いっさいは過ぎて行きます。」としか彼には映らないのである。

本論考では「幸福」という観点から女達との関わりを論じる事で、「人間、失格」の烙印を押された葉蔵の破滅の過程は言及出来たが、当初の問題提起に掲げた「人間」という、より大きな問いへの解答を導き出すには至らなかった。しかし、「人間」に「失格」する過程を「幸福」という観点から考察する事によって『人間失格』が壮大な自己喪失の物語である事へのアクセスには成功した。これは「幸福」という視点の設定が無意義でなかった事の証明になってくれたのではないだろうか。以上、これらの成果と課題の確認を以て、本論考を

締めくくるとしよう。

参考文献一覧

- 奥野健男『太宰治論』近代生活社、1956 年
- 奥野健男『現代作家論 10 太宰治』五月書房、1958 年
- 奥野健男『太宰治論＜増補決定版＞』春秋社、1968 年
- 奥野健男『太宰治』文藝春秋、1973 年
- 佐古純一郎『太宰治によるデカダンスの倫理』春秋社、1960 年
- 佐古純一郎『太宰治論』審美社、1963 年
- 佐古純一郎『太宰治と聖書』教文館、1983 年
- 佐古純一郎『太宰治の文学』朝文社、1992 年
- 佐古純一郎『太宰論究』朝文社、1992 年
- 日本文学研究資料刊行会編『太宰治』有精堂、1960 年
- 文学批評の会編『批評と研究 太宰治』芳賀書店、1972 年
- 亀井勝一郎『無頼派の祈り』審美社、1976 年
- 東郷克美・渡部芳紀編『作品論 太宰治』双文社出版、1976 年
- 饗庭孝男『太宰治論』講談社、1976 年
- 饗庭孝男『太宰治論』小沢書店、1997 年
- 相馬正一編『コロキウム 太宰治論』津軽書房、1977 年
- 関井光男編『太宰治の世界』冬樹社、1977 年
- 菊田義孝『太宰治と罪の問題』審美社、1964 年
- 菊田義孝『人間脱出—太宰治論』彌生書房、1979 年
- 鳥居邦朗『太宰治論』雁書館、1982 年
- 佐々木啓一『太宰治論』和泉書院、1989 年
- 佐々木啓一『太宰治 演劇と空間』洋々社、1989 年
- 中村三春『フィクションの機構』ひつじ書房、1994 年
- 鶴谷憲三『太宰治論——充溢と欠如』有精堂、1995 年
- 長部日出雄『辻音楽師の唄 もう一つの太宰治伝』文藝春秋、1997 年
- 陽羅義光『太宰治新論』国書刊行会、1997 年
- 安藤宏編『日本文学研究論文集成 41 太宰治』若草書房、1998 年
- 東郷克美『太宰治という物語』筑摩書房、2001 年
- 服部康喜『終末への序章—太宰治論—』日本図書センター、2001 年
- 長部日出雄『桜桃とキリスト もう一つの太宰治伝』文藝春秋、2002 年
- 安藤宏『太宰治 弱さを演じるということ』筑摩書房、2002 年
- 梶原宣俊『選ばれし者の悲哀とリリズム 太宰治の思想』文芸社、2003 年
- 遠藤祐『太宰治の＜物語＞』翰林書房、2003 年
- 志村有弘・渡部芳紀編『太宰治大辞典』勉誠出版、2005 年

- 青木京子『太宰文学の女性像』思文閣出版、2006 年
 - 田中和生『新約太宰治』講談社、2006 年
 - 山内祥史編『太宰治研究 17』和泉書院、2009 年
 - 東奥日報社『私の太宰治 その魅力』東奥日報社、2009 年
 - 中野久夫『太宰治・生涯と作品の深層心理』審美社、2009 年
 - 松本和也『太宰治『人間失格』を読み直す』水声社、2009 年
 - 斎藤理生・松本和也編『新世紀 太宰治』双文社出版、2009 年
 - 安藤宏編『展望 太宰治』きょうせい、2009 年
 - 松本和也『太宰治の自伝的小説を読みひらく』有斐閣、2010 年
 - 弘前大学教育学部 国語講座『太宰へのまなざし ―文学・語学・教育―』弘前大学出版会、2013 年
 - 斎藤理生『太宰治の小説の＜笑い＞』双文社出版、2013 年
-
- 鳥居邦朗「『人間失格』論から太宰論へ」(『国文学：解釈と鑑賞』46 (10) 至文堂、1981 年)
 - 大森郁之助「人間失格はなぜ『父の罪』か」(『札幌大学女子短期大学部紀要』8 札幌大学、1986 年)
 - 中島国彦「『人間失格』への一視点——『引用』の機能」(『国文学 解釈と教材の研究』36 (4) 学灯社、1991 年)
 - 高田知波「『人間失格』と『葉蔵物語』」(『駒沢国文』31 駒澤大学、1994 年)
 - 中村三春「語り論的世界の破壊—太宰治『二十世紀旗手』のフレーム構造—」(『国文学：解釈と鑑賞』59 (4) 至文堂、1994 年)
 - 安藤宏「太宰文学における『女性』」(『国文学：解釈と鑑賞』64 (9) 至文堂、1999 年)
 - 孫才喜「太宰治『人間失格』論 ―葉蔵における『道化』・『甘え』・『恥』と『罪』—」(『日本文藝研究』51 (4) 関西学院大学日本文学会、2000 年)
 - 萬所志保「太宰治『人間失格』試論―『私』という居場所―」(『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第 7 集、2002 年)
 - 斎藤理生「大庭葉蔵の饒舌―『人間失格』論―」(『解釈』49 (7・8) 解釈学会、2003 年)
 - 山本勝正「太宰『人間失格』の方法についての一考察」(『国語国文学誌』(27) 広島女学院大学日本文学会、2006 年)
 - 小林美恵子「『人間失格』の女たち―『人間』葉蔵の語り部たち」(『国文学：解釈と鑑賞』72 (11) 至文堂、2007 年)
 - 安藤宏「『人間失格』の機構」(『国文学：解釈と鑑賞』75 (9) ぎょうせい、2010 年)
 - 荒井順子「『人間失格』におけるアイデンティティーの変容 ―葉蔵の『人間失格』―」

（『清泉語文』（2）清泉女子大学日本語日本文学会、2010 年）

- 綾目広治「太宰文学のなかの女性たち—その幸福と不幸—」（『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』34（1）ノートルダム清心女子大学、2010 年）
- 木村純二「太宰治における「芸術家」の位相—「奉仕」としての創作活動—」（一般財団法人ホモコントリビューエンス研究所ウェブサイト、2011 年）
- 青木京子「『人間失格』の構成 —＜動物＞表現の方法—」（『愛知文教大学比較文化研究』（11）愛知文教大学国際文化学会、2011 年）